

20

東京都現代美術館研究紀要

15

関 直子

はじめに

1930年代前半に絵画制作を本格的に開始した桂ゆき(1913年－1991年)は、透視図法のようなひとつの表現方法で統一された、静的で安定した画面ではなく、異なる表現方法が並存する緊張感のある、ときにそれがユーモアへとも転じる、観る者のバランス感覚を揺るがすような絵画を制作した。

その制作の過程においては、様々な感覚を往還する^{註1}、多角的なアプローチで対象に迫り、特定の見方に収斂されることはなかった。それゆえ、ひとつの作品において、完成ということは容易に訪れることはなく、何かを加えていく、あるいは変更していくこと、即ち動的均衡が更新され続けたのである。例えば、完成した作品に物質を何か付け加えるだけで画面に異質な要素が侵入し、画面構成が新たな次元に入るコラージュの制作や、またコラージュで構成される画面に時間を経てから戯画的なキャラクターを描き込むことを行った。更に、ひとつのコラージュ作品を制作した後に、そのコラージュ作品を描写する別の油絵を描く場合(またその逆も)もあった。桂の創作活動とは、物質をめぐる視覚と触覚の多彩な回路の展開の過程という一面があり、そこに桂固有のアレゴリーが用意されていた。

本稿は、このような桂の「終わりのない絵画」の意味を、寄贈資料等の具体例をとおして再考するものである。

1 初期のコラージュ

(1)1920年代半ばからの池上秀敏の元での、手本を写すばかりの日本画の手習いに飽き足らず、同じ時期、桂は横長のスケッチブックに、花や虫などを水彩で観察して細密に描いている。その中のフリージアの頁^{註2}は、一瞥すると全てが水彩で描いたものに見えるが、茎の部分は別の紙に描いたものを糊付けすることで、立体感が与えられたものである。その前の頁には昭和2年と記されていることから、恐らく当該頁もこの頃に手がけたものと考えられる。実際に花を眼の前にして写生しながら、その過程で、葉とは異なり、円筒形の茎には厚みが必要だと感じ、茎を描写し、それを切り抜いた紙を貼ったのであろう。この十代前半のささやかな試みは、コラージュという言葉で説明される、エルンストによる既存の画像を再構成するものとも、屑のような断片化した事物を集めるダダ的精神のシュヴィッターズともやや異なる関心事から出発したことを物語っている。そしてまた、1912年にピカソが籐を印刷したクロスをカンヴァスに導入したパピエ・コレとも異なる。トロンプ・ルイコという点では類縁性があるとも言えるが、印刷された既製品を、切子面を描いたカンヴァスに挿入するという、異質な要素の衝突とは方向性が違う。桂の、小さなスケッチブックでの試みは、掌中にある花を見つめ、絵筆で描写し、更に手で直接紙に触れながら、細密にあらわしたものの、即ち視覚と触覚の両方向から花を捉えようとしたものと言える。



図1
東京都現代美術館蔵



図2
[レースと紙のコラージュ] 東京都現代美術館蔵

(2) 女学校を卒業した1930年代初頭、桂はかねてより希望していた油彩画の基礎を中村研一や岡田三郎助のもとで学び、1933年からはアヴァンギャルド洋画研究所に通って、東郷青児や藤田嗣治などフランスより帰国した画家たちから、西洋美術の最新動向に触れることになる。そして、1935年には帰朝した海老原喜之助の勧めで初めての個展をコラージュ展としてひらき、更に1938年には藤田の勧めで日動画廊で個展を開いている。この時期の僅かに現存するコラージュの作例として、紙のボードを支持体として、印刷物やレース、三日月型の布、植物の根などを貼付けた作品があり⁸²。1950年代に桂の新宿のアトリエに飾られていたことが判っている。

この作品では、かなり破損しているとはいえ、主たる構造は残存しており、レリーフ状の円形や半円形の布の内側の部分は、まるで望遠鏡のように画面奥への奥行きを齎している。ここでは様々な紙や布やらが次々に重ねられ、奥行きと共に、画面の手前に向かって様々な手触りの物質が画面を構成していた。破損によって露となったコラージュの構成のプロセスは、支持体の上に次から次へと異なる物質を重ねて、ひとつひとつの物質がもつ意味を見え隠れさせながら、画面の意味を構成していくものであったことが諒解される。

(3) モノの質感を表現することへの関心から桂は油絵だけでなく、漆絵を手がけていたことが知られる。現存する2点のうち1つは、切り株の質感の再現を追求したものだが、もう1点は、漆に卵の殻をコラージュした、珍しい作品である⁸³。支持体は小型の絵画用の木のボードで、画面全体が、まるで紙を千切ったコラージュがそこにあるかのように、一枚一枚の矩形が漆で丹念に描かれている。背景も、中央の鶏の鶏冠も、その足下の花も、やはりコラージュが貼付されているかのように、漆で再現されている。一方、鶏の白い身体は卵の殻を砕いたものを、やはり矩形のブロックにして、貼付けたものである。貼ることと描くことは、入れ子状になっており、細密に砕いた殻を貼るという手による作業は、気の遠くなるような繰り返しを必要とし、触覚と視覚は画面の上で連携して、鶏の実体に迫っているのである。

そしてここでは、漆絵という油絵に匹敵する質感の再現の追求ではなく、漆という粘性と厚みを有する画材自体が背景の千切った紙そのものとして提示され(しかもそれは紙を描写したものである)、更に、白い殻を支持体の板に固着する役割も担っている。殻も漆も、物質として板の上に存在し、殻は固い破片でありながら、柔らかい羽をあらわし、漆は紙の断片を描写することで、紙という別の物質としての意味をもつものになっているのである。

鶏の漆絵では、あらわされた鶏の身体と、それをあらわす殻とのあいだには、やがて卵から鶏に成長するというゆるやかな意味のつながりがあった。それは桂がこの作品を構想し制作するときの、素材と表現方法と主題の決定において、ひとつの契機となったに違いない。コラージュにおいては、絵筆で描くだけの絵画に比して、貼付ける物質自体が有する意味が、画面に対して機能する役割や関係はより複雑である。

(4) 例えば、現在おかざき世界子ども美術博物館に収蔵されている1930年代前半の作品⁸⁴では、島を捉えたモノクロームの写真を桂は矩形に千切り、90度回転させてから、それを紙の上に、歪んだ台形のようなかたちになるように貼りつけている。もとの紙焼き写真を千切った段階で、現実の海の中に浮かぶ島のイメージは破壊されている。けれども、断片化された写真のなかで、左上の破片だけは、他の断片から少し距離を置いて(支持体の紙の色が隙間から見える)おり、回転されることもなく、島が海に浮かんでいることがはっきりわかる。それに対して、他の写真の断片は、右下にいくほど小さくなり、その上、ランダムに幾層にも重ね貼りされていて、元の写真の海景を、頭のなかで組み立てるのは難しい。

つまり、桂の写真コラージュの中で唯一現存している本作品では、海景をイメージとして写し取った写真は、千切って断片化された段階で、モノクロームの物質へ還元されてしまう。更に写真の断片は回転され、重ね貼りされることで、かろうじて残っていたイメージのよすがも、ほとんど失われてしまう。しかしその断片の中の1つだけが、周囲から独立し、正体のままであることから、唯一、イメージを読み取ることが可能であり、その他多くの読み取



図3
〔鶏〕東京都現代美術館蔵

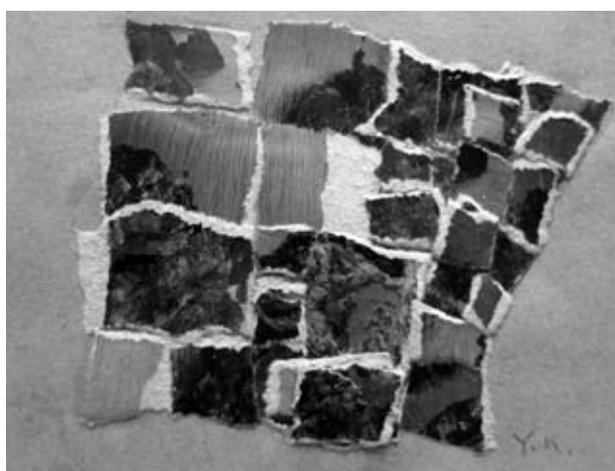


図4
おかざき世界子ども美術博物館蔵

り不能の物質と化した印画紙とは対照的に、ほんの僅かに、風景写真の意味を投げかける。おそらく、この左上の断片は支持体の上に最初に置かれたものであり、そこから右方向へ、そして下方へと糊付けが進む過程で、断片の重ね貼りの度合いは増していった、即ちイメージの読み取りを封印させていったのであろう。

ここでは、制作の過程においても、また鑑賞においても、断片化と封印というイメージの読解をめぐる視覚的な要素と、浅いレリーフのような画面手前に飛び出してくる、触覚的な要素とが、極めて緊密に交錯し、その複数の回路が、10cmにも充たない小さな画面に、強固な凝集力とインパクトを齎している。桂が目にした海景は、ただの紙焼写真とは全く別の作品として立ち現れたのである。

2 コラージュを描く／描いたものをコラージュでつくる

前章では、桂の初期のコラージュの中から4点を採り上げ、自ら描いた紙の断片や布、写真、漆と殻といったモノと、それら物質のもつ意味、制作のプロセス、そして構成された作品と貼付されたモノのもつ意味との関係などについて、個別の作品として観察した。

本章では、ほぼ似通ったモチーフを共有するコラージュ作品と絵筆で描いた作品とを比較し、視覚と触覚、イメージと物質、制作のプロセスなどを軸に、両者を制作した意味について考察する^{註2}。

(1) コルク

まずはじめに、1935年ごろに制作されたコルクを用いたコラージュ^{図5}と、コルクのコラージュを描いた油彩^{図6}を採りあげる。桂の回想によれば、千駄木に住んでいた1930年代に、コルクを扱う工場で瓶の栓の部分を削り貫いたあとの廃棄されていたものを使いコラージュの制作を行ったが、やがて南方からのコルクの輸

入が難しくなったので、本作は戦前のコルクを用いた貴重な作例である。高さ50cm余の2枚に分割された板に、文字通り、糊付けされたコルクは、栓として削り貫いた残りの廃棄分のため、半円形のカーブした凹面側を見せて、並んでいる。しかも、コルクは半円カーブの先端がそれぞれ上と下にくる縦方向の配置のため、底のように複雑な影を作品に投げかけ、レリーフの効果がコルクによって齎されている。また、反復に見えるコルクの形状も実は多様で、中央に水平に並ぶコルクは、横長の小さなものであり、その直ぐ上には茶色のコルクが不規則に埋め込まれ、裂け目のような効果を齎している。更に、その少し下には、ベースのようなかたちの茶色のコルクと、白く細長いコルクが、半円形のコルクの連なりの中にかきとらまわっている。壁のようにも、また地中を垂直方向から除き見たようにも見えてくるのは、水平方向の細長いコルクの列が視覚的な上下方向の意識を喚起するからなのかもしれない。

一方、コルクのコラージュをカンヴァスに油絵で描いた作品は、縦がコラージュより10cmほど長いが、横幅はほぼ同じである。画面には、コラージュの支持体の板と同じ茶色の地が背景に描かれ、中心部分の茶色のベース型や、細長い小型のコルクの列もあらわされている。また、茶色のコルクはこってりと何か紙のようなものを含んだ油絵具で描かれ、質感が強調して再現されている。

ところが、薄い色のコルクの多くはその表面の質感も、ぎっしりと詰まって並ぶ様子も再現されていない。むしろ全体として、コラージュとは異なり、不均一な形や大きさのコルクが、列も奥行きもランダムに並び、更に、よく見れば、上側三分の一のコルクは比較的大きな塊として画面の手前に飛び出している。署名の記されたコルクの存在は、突出していることを強調するものであり、その下側のこげ茶色の帯は、これら前方に飛び出した立方体のコルクの下面を描いたものだったのだ。

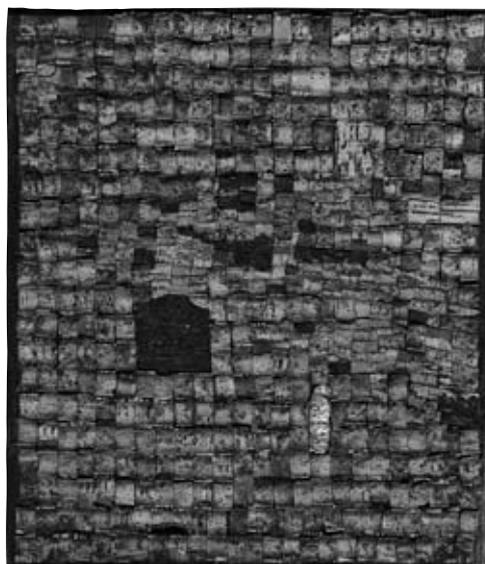


図5
《作品(コルク)》 山口県立美術館蔵



図6
《日なた》 下関市立美術館蔵

更に、比較的大きなコルクは、例えば画面下方の立方体の塊として(その上方のベース型の焦げ茶の部分の空洞から落ちてきたかのように)、あるいはくるとカーブした状態で浮遊するかのように描かれている。また、コラージュにはなかった要素として、薔薇の花と花卉が細密にコルクの手前に、影を伴って浮かぶように描かれている。茎から切断されながら、画面の中で永遠に枯れることのない薔薇の花は、視覚の上で享受されるものであり、コルクのコラージュの中では生息することもできない。コラージュのコルクが現実空間で物質として存在するのに対し、油絵の描写は、非現実の絵画的な想像の産物としての表現に過ぎないことを強調しているのだろう。

以上、コルクをめぐる2点の作品を観察してみると、コラージュを先行して制作し、その後、油絵を描くという経緯が想定されるわけだが、きっかけとしてコラージュを、油絵で再現することから始まっていたとしても、描写の過程で絵画は、コラージュのコルクを実際に手であれこれ動かしたかのように変化していき、更に、コルク自体が自発的に、空中浮遊や変形を起こした虚構の世界を描いたものに変化していったのではないのか。

このように、ほぼ同一のモチーフをめぐる異なる表現による2点の作品の制作は、虚構としての絵画空間と、物質として現実空間と接触するコラージュの違いを確認することから始まり、視覚と触覚を往還する過程で、コルクを固定的な位置から眼差すこと、即ち作者が視覚で世界を支配するだけでなく、手で触れ並べるコルクという物質が構成する側から世界を捉えることを制作の基底に据えることを促したのではないのか。

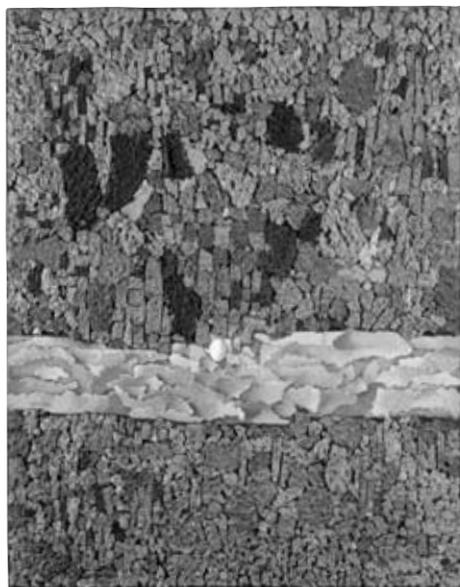


図7
《作品》 下関市立美術館蔵

その後およそ30年を経た1979年に、桂は久方ぶりにひらいた個展で、様々な種類のコルク(そして紙)を存分に使った大型のコラージュばかりを発表した。それは、物質によって新たな世界の捉え方を提起するもの派の作家たちが精力的に活動していた時期でもあった。コルクに接触したり、それを描いていくという制作方法の意味をこの時期に再考することは、桂にとり回顧的な機会などではなかったはずである²³。コラージュは、様々な形状のコルク片や紙粘土などを用いて、それを板に屹立たせたり、釘で打ち付け重ねていくなどして制作した大作が中心であった。

そしてそのなかには、紙粘土のコラージュと、油絵でコルクのコラージュと卵を描写したものを並存させた1978年の作品もあった²⁷。40年前に2つの作品で試みていたコラージュとそれを油彩で表現することを、今度はひとつの作品のなかで共存させた。遠くから見ても、またかなり接近してみても、油絵による細密描写が熟練の域に達し、物質と描かれたものとの差に気づくことはないこの絵を、桂は展覧会の後、自宅のソファのある壁に飾っていた²⁸。

1970年代の作品には、即物的な質感をもつコルクのほか、かつてはなかった要素である卵が中央に描かれた。当時桂は卵をモチーフとしたコラージュも制作している。卵は、生命をめぐって桂が抱くアイロニカルなもの(あらゆるものを生み出しこれを讃歌する面と、留まることのない増加が齎すことへの省察を促す)を示すものなのだ²⁴。若いときからの物質を介した視覚と触覚の往還の提示だけでなく、新たな意味の生成ということにも関心は向かっていたのである。



図8
自宅アトリエでの写真 東京都現代美術館蔵

(2) 1950年代の静物画

戦後の占領期に、桂は二科会や女流画家協会、日本アヴァンギャルド美術家クラブ主催の展覧会などで、新作を精力的に発表していたが、それは油絵が中心であったため、コラージュの制作の実態は未だ詳らかではない。上述の団体展では、同時代の社会や自身の生活のなかで直面したできごとなどを主題として、寓話の枠組みを使って、多様な読み取りが可能な大作を発表していた。また同時期には、静物画の小品も集中的に制作していたことは、アトリエの写真等から確認できる。その中には、画面を構成するものに類縁性を見出せる、油彩画^{図9}とコラージュ^{図10}がある。油絵の方には、画面右下に1951.11と、珍しく、制作月までが記されている。

油絵の方は、緑色のテーブルの上に、花や果物、皿、3種類の緋の断片とりボン、枯葉が描かれている。そして緑のテーブルに、補色の赤が背景に取り合わされることで、画面はキッチンな印象を醸し出す。手前の不自然に屹立する柿と、皿、空中に浮遊する緋と枯葉は、1940年の奉祝展に出品した《賀象》と同じく、フィクションとして構成された画中のできごととして描かれている。画家自身が時代にかかわらず着用していた緋は、戦中と戦後を繋ぐものであり、また、2つの穴がまるで仮面のような枯葉は、戦中に描いた《伐採》の枝と同じく、幹から切断された植物として描かれている。それもまた、不在の誰かをあらわしたものであるであろう。ここでは、背景の赤い壁には皿の影が黒く描かれているのに、手前の静物にはハイライトはあっても、そのような影はなく、不統一な明暗法が、色彩のキッチンさや、一部浮遊する静物とあいまって、伝統的な西洋の静物画に則りつつ、それとは異なる固有のモチーフと描き方の組み合わせゆえの居心地の悪さを齎している。

1952年の3月に地方紙に執筆したエッセイに、隣家がジュラルミンの塀を造ったからといって、自家の竹垣を変える必要はないとし、それが自覚された独創ならば、誇りに思ふべきだと記している画家であれば(山陽日々新聞1952年3月1日)、これが静物画という枠組みを使った、意図的な挑戦であることは明らかである。



図9
《静物》 東京画廊蔵

一方、コラージュの方は、縦長の厚紙の上に、家中の端切れを総動員したかのような、厚みも色も材質も異なる布が貼られている。布が剥がれ落ちたところには、林檎の輪郭線が鉛筆で描かれていることから、この作品は、単一の素材で作品を構成していったコルクなどのコラージュとは違って、むしろ、伝統的な貼り絵に近いものかもしれない。背景には千鳥格子のウール地、グレーの化繊、3種類の緋、そして林檎の周囲の影をあらわす毛足の長い黒い生地が選ばれているのが確認される。

端切れであらわされたものは、林檎、2つの花(図9と同じ)、それらの右側には白い蝶が舞い(油絵では浮遊する枯葉に相当する)、更に下方に目をやれば、緑色の端切れが花の下に見える。これも、静物画のテーブルの色と呼応する。

実は1951年に、桂はガラス絵協会の結成に参加しており、コラージュでは奥から手前へと進む制作とは逆のプロセスを、ガラス絵で挑戦していたことを鑑みると、多様なアプローチへの探求が加速していた時期とも考えられるのである。というのも、この時期に制作したガラス絵《早春》は、1951年の油彩《農婦》に基づくもので、それは上述のジュラルミンの塀の記事の挿絵にも転用されている。《早春》のガラス絵の背景の赤色とそのムラのある塗り方は、図9の静物画の背景と類似していることを踏まえれば、この静物画はガラス絵の表現を油画であらわそうとしたものと考えられるのかもしれない。ガラス絵では、背景は一番最後に描かれる絵具の層であり、そこに原色の赤が使われることで、遠近感が無化される。桂はここで、ガラス絵のような、図も地も等質な工芸的な画面として、油彩画を描こうとしたのではないか。とすれば、1950年代初頭の桂の制作は、油絵の中での戯画的表現と細密描写の対比による絵画構成に邁進していただけでなく、画面手前にモノを貼付けていくコラージュ、画面前面がフラットでその奥に層が連なるガラス絵の制作、画面が均質なガラス絵を油絵に描くなど、多彩なアプローチが同時に進行していたことになる。



図10
〔りんごと蝶〕 東京都現代美術館蔵

(3)紅絹

1979年のコルクを用いたコラージュ展以来6年ぶりに、72歳の桂は、ハリボテでつくった道具類を紅絹で覆う作品による、新作個展を開いた。薄い絹地を紅花で染めた紅絹は、女性が着物の下に身につけるものだったが、桂によれば、戦後突如として古くさく感じられ、破棄されるか、引き出しの奥に仕舞い込まれるかしたのだという⁸⁵。紅絹は、戦前までは着物によって視界から隠されていて、戦後には着用もされなくなり、視界からも世の営みからも二重に隠されたものと言える。この個展では3種類の作品群が展示されたが、その一つは、紅絹で覆った襖や段ボールを支持体として、紅絹に綿を詰め、自画像や生命の誕生などをあらわしたレリーフ状の作品で、桂は隠された存在だった紅絹を反転させ、表面にもってきた。それは板にコルクを付けたコラージュと同様、地と図の関係が固定したものだが、素材としての紅絹の意味と、あらわされたモチーフによって、コルクの作品よりアレゴリーの度合いは高まっている。

2つ目は、白い壁に懸けて展示した、高枕や下駄、しゃもじなどの古道具に角をつけたハリボテを紅絹でくるんだものである⁸⁶。古くなって打ち捨てられて妖怪となった九十九神は夜中に行列をつくったが、桂は白い壁を背景に紅色になったものとして、楽しみに並べた。それらは、様々な方向を向き、重力のバランスで動きだすような気配をたたえていた。

3つ目は、中が空洞のハリボテの大きなお釜で、展示室の中央に置かれた。壁の上で行列する古道具たちの列からこぼれ落ちた存在にも見えるが、大きさや独立した形状から、発想としてはお釜から九十九神へと展開していったと考えられるかもしれない。桂は自身が中に入り込むことも可能な大きさと語っており、ここに道具の擬人化の発想の淵源を見ることが出来る。

この1985年5月の東京での個展の後、同年秋にはインスタレーションをテーマとしたグループ展に、これらの紅絹の作品の多くが出品されたが、展示作業の写真から、桂が立ち会った事が判る。そこでは、部屋の中央に置かれた大きなお釜を取り囲む壁の2面に、古道具は横一列に展示された⁸⁷。また、《自画像》は横向きに90度回転して、《手相》と上下に接した状態で、《きつね》と《ためぎ》は縦の向きのままだが、やはり上下に繋げて展示している。古



図11
個展 (伊奈ギャラリー) 展示風景 撮影: 伊奈美次

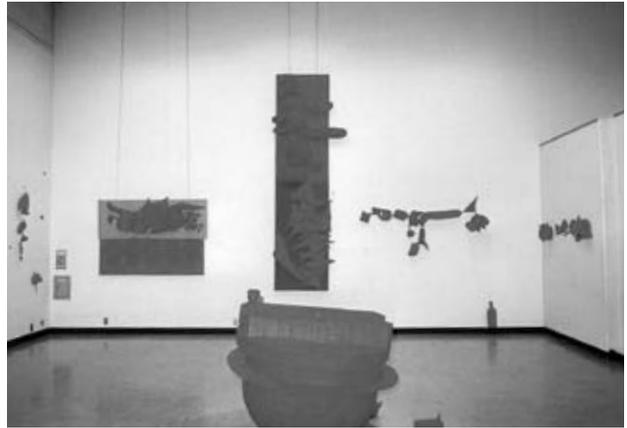


図12
「今日の作家! 85 インスタレーションとは何か」(横浜市民ギャラリー) 展示風景

道具は、狐と狸を挟んで、自画像と同じ高さに整列しているのだが、瓶が1本、その隊列から外れて、床にある。このように、紅絹を貼付けたハリボテの古道具は、厚みのあるコラージュの発展形として、白い壁を背景として、展示ごとに、新たな構成をとった。1935年の個展において外来のコラージュという概念から出発して作品を制作したのではなかったように、1985年の紅絹の個展においても、桂はインスタレーションという作品のあり方から作品を構想したわけではなかった。モノを介した、視覚と触覚の往還による、終わりのない絵画という桂の制作態度が、それぞれの時代の新しい作品のあり方と交錯したと捉えるべきなのである。



図13
《赤と白》 東京都現代美術館蔵

紅絹と集中的に関わった桂は、ハリボテに包んで並べるだけでなく、油彩画でも紅絹を採り上げている⁸⁸。月刊誌『一枚の絵』1988年8月号に図版が掲載されたこの作品には、ページの背景に、ピンで留められた紅色と白の布が下がっている様子が描かれている。ピンや布には明暗が賦されているが、布が背後の壁に投げかけるはずの影はなく、その絵画空間は曖昧なままである。意味ありげだが雑然とした塊状の白い布に対し、紅色の布の方は下端からほつれてきて、一枚の布として翻りつつ、その一部が、甲殻類の脚のような形状や、紅絹に包まれた枕のような形に変容している。白い壁を背景に紅絹に包まれた古道具が吊るされて展示されたインスタレーション作品での試みを油絵で描く

にあたり、桂はカンヴァスという支持体が布であることを証すように、一枚の布としての紅絹を垂らし、更に、その支持体であったはずの布が立体に変容していくかのように、紅絹を描いたのである。紅絹は皮膜として存在を覆い隠すと同時にその色彩によって明らかにするものでもあり、甲殻類という生物も妖怪となった古道具も、等質のものとして提示する。戦中から戦後にかけて緋が果たしていた以上に、紅絹はこの時期、視覚と触覚を繋ぐ極めて重要な役割を担ったと言えるだろう。

更に、紅絹をめぐる、コルクボードを支持体として、実際に白い布と紅絹を貼付けた上に、布に皺が寄ったかのように、コンテで影を描いた作品もある¹⁴。ハリボテの厚みを排除した紅絹と白い布でコラージュを創る過程で、布の薄さを逆手にとって、手縫いの糸でその重なりや物質感を強調している。この作品に着手した当初は、もしかしたら手作業の痕跡を物質として提示した段階までだったのかもしれないが、桂はそこに影という幻影を描き加えた。一際濃い中央下の部分はトンネルのような穴となって立ち現われる。



図14
東京都現代美術館蔵

以上、紅絹をめぐる桂の思考と試みは、素材自体が抱える意味の変遷を主題としつつ、布としての機能によってその主題を遡上にあげ、描くこととモノとして提示すること、視覚と触覚のあいだに、いくつもの回路を築こうとするものだった。それゆえ、複数の作品や展示にまたがって展開するその軌跡の意図は、逡巡や蛇行のなかに垣間見せる僅かな手の痕跡に見出すことができるのだろう。

3 コラグラフと本

桂の創作における「終わりのない絵画」の意味を、最後に別の角度から考えてみたい。

それは、高さ30cmほどの板の表面に、マッチのような棒を貼付け、白と黄色で彩色したコラージュを調べる過程で、板の裏側が版木となっていたことから、導きだされたことである¹⁵。

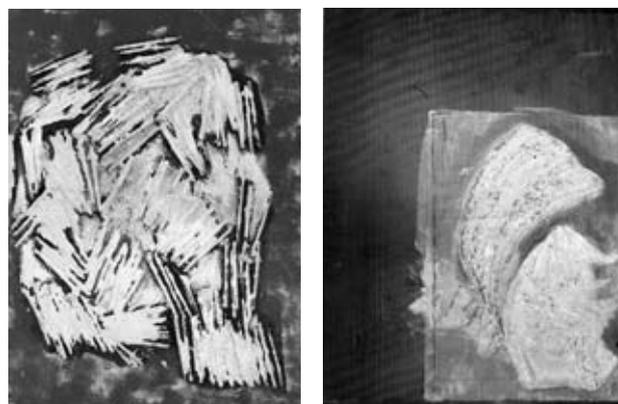


図15
コラグラフの版木(右)と反対側のコラージュ(左) 東京都現代美術館蔵

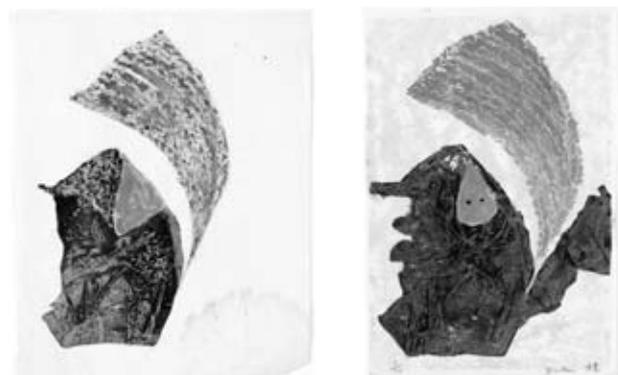


図16
東京都現代美術館蔵

当該の版木¹⁵には、乾燥した植物と白い紙が貼ってあり、それぞれ黄色と白のインク、背景部分にも黄色のインクが残っていた。これに相当する版画は、高さおよそ25cmのものが3点確認できた¹⁶。版木の植物の部分は、版画では帚のようなかたちのものになり、実際の帚の素材と近接する。また紙を貼った部分は布を纏う魔女のような存在にあたる。このような、版木を彫るのではなく、事物を貼付けて、それを版木とする版画はコラグラフと呼ばれる。コラージュを版にしていると考えれば、桂がこれを版画に展開したのは誠に自然ななりゆきだったと言えるだろう。桂と版画の関わりとして、1955年に描いた油彩の《トラの威を借りた狐》のアイデアをもとに桂がジंक板に版を描き、利根山光人が摺ったことなどがあったが、自分で版も刷りも手がけるコラグラフは、桂にとって全ての工程に関わることができる興味深い表現方法だったのだろう。

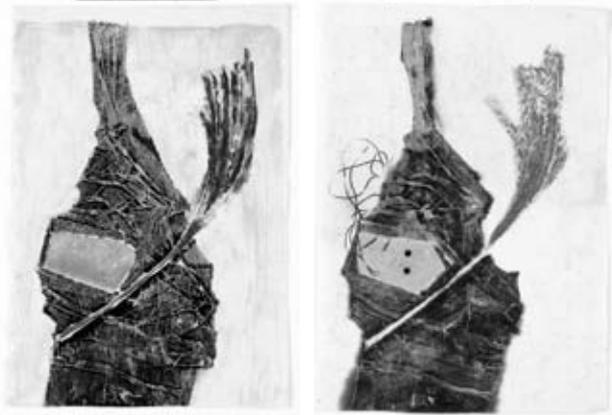


図17
東京都現代美術館蔵

それは、版木はないが、4段階の版画が残る、図16とイメージとしては類縁性のある作例からも付度される^{図17}。おそらく薄い和紙を折りたたみ、その上に植物を貼った版から展開したと想像されるその版画は、刷りごとに色の組み合わせが変化するだけでなく、当初縦型だったときには眼帯のような矩形の部分に、新たに紐を貼った版では、眼帯部分に目を描き加え、回転させると凧に変化したものになっている。複数の刷りの違い、版そのものに、新たな素材をコラージュしてゆき、さらに摺った版画に描き足すというコラグラフのプロセスは、まさに、素材がもつ質感と意味から派生して、形やイメージが変容し続ける、即ち「終わりのない絵画」そのものだったと言えるだろう。

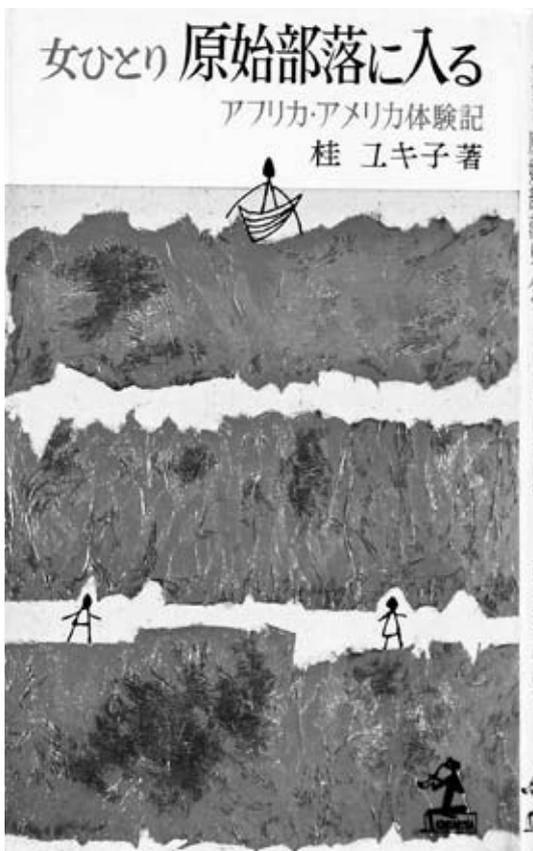


図18
『女ひとり 原始部落に入る アフリカ・アメリカ体験記』
1962年 光文社刊

そしてまた、米国滞在時に制作した、カンヴァスに和紙を油絵の具で着彩しながら貼付した、何層かに分節された絵画作品を、完成後に本の表紙などに使うために、180度回転させ、新たなキャラクターを付け加え、全く別の意味をもったものとして提示したことも見逃せない。代表的なものとして、1961年の作品(サインもある新潟市美術館寄託の《作品》)の写真を回転させ、3人の人物を線描で新たに描いたものを表紙にした、『女ひとり 原始部落に入る アフリカ・アメリカ体験記』を挙げておきたい^{図18}。帰国直後の個展で、ロスコなどとの関係を論じられたこれら一連の作品は、実際は画面の過半に、大地のような肌ざわりの皺を寄せた紙を貼ったコラージュで、米国の抽象絵画とは距離をおくものだった。後に、富士山を上空からみると、だらしないほど大穴のあいた妙に平たい物体で、とても富士山とは思えないと記す桂は、軽々と視点を転換させ、ユーモアを込めて、大地の上にひとを描き込んだのであろう。ここにも、時間を経た「終わりのない絵画」のあり方が垣間見えるのである。

おわりに

桂は1968年には浅草橋の玩具会館にモザイク壁画を、1984年には父祖縁の山口県の新庁舎竣工に際し、ホールのための緞帳のデザインを行っているが、いずれについても、自らそれについて語ったり、履歴に記すことはなかったようである。デザインは行っても、実際に画面をつくりあげたのは他者の手によるものだったからであろうか。手と目の往還により、物質を捉えることによって、作品制作を展開する桂の真意を付度するばかりである。「終わりのない絵画」とは、手の届く距離で制作することからはじまるものであり、コラージュを媒介とした意味の切断と隠蔽、そして新たなアレゴリーの創出を続けるみちのりのことなのである。

註

1. 桂は選歴を迎えた年、最後の晩餐を特集した雑誌に、思い出すだけで、全身の細胞が活気づく、もう一度食べたいものとして、9歳の夏休みに避暑先の川原で食べた、漁師のおかみさんが握ってくれたお弁当の握り飯について記している。「…自家製のナマ味噌は強烈な印象をうけた。あの麴の匂いは、たくあんや竹の皮や干物の匂いと共に、そしてあのときの川の水のぬるさや強い日ざし、おはぐろトンボなどと共に、そのときと同じ感覚でいまだに全身によみがえってくる。」(桂ゆき「私の『最後の晩餐』」『文藝春秋』51巻16号1973年11月、p. 381)味覚をとおした体験は、過去の様々な記憶のなかでも、深い刻印を残すものであることは衆知のことだが、桂が半世紀前の味覚体験を、臭覚、触覚、視覚の記憶と共に記述していることは注目される。味蕾が増え始める時期に五感が開いていった桂の回想は、その後もエッセイのかたちで展開していった。

また音をめぐっても、早朝の禅寺で、鶯の鳴き声を耳にして、笑ってしまったことを記している。(桂ゆき「お釜のことなど」『INA-ART NEWS 桂ゆき展 紅絹のかたち』1985年5月、No. 36)あまりの見事さに滑稽な気分になったのか、同じ声なのに初めてきく声のようなショックをうけたからなのか、そしてなぜホーホケキョウでなければいけないのかと思い、「もともと自分勝手な声で好き放題におやりになってみたら?」などと考えるのだが、もちろん否定的な気持ちではなく、あらゆる生きものへの共感を覚えたのだという。日常の音に対する自由な感覚は、あらゆる感覚についての柔軟な飛翔に繋がるものであろう。

2. 桂ゆきの油彩画における触覚的な発想と重層的画面の特質の関係については、以下の下関市立美術館の岡本正康氏による、同館所蔵の作品調査に基づく論考がある。岡本正康「桂ゆき—1930～40年代の油彩画～状態調査の記録から～」『下関市立美術館研究紀要』第8号2001年3月、pp. 16-30、岡本正康「桂ゆきの油彩画—触覚的発想と重層性— 下関市立美術館が所蔵する1930年代と1940年代の作品の修復処置の記録から」『桂ゆき ある寓話』展図録、2013年、東京都現代美術館、下関市立美術館、pp.282-287。また、同館所蔵の桂作品の修復を行った、絵画修復家の小谷野匡子氏による、当館での「桂ゆき ある寓話」展での講演会「修復家の見た桂ゆき作品のうら・おもて」(2013年5月18日)、並びに同氏との同展出品作品の調査からも多くの示唆を得た。

3. 筆者は1979年の個展とコルクによるコラージュ制作の契機の一つとして、九室会以来の知己であった斉藤義重の制作活動との関係を重視していたが、「桂ゆき ある寓話」展での北沢憲昭氏の講演会「現実と幻影—桂ゆきのコラージュ的発想をめぐって」(2013年5月25日)で、画廊での個展を実見していた同氏の回想は、この時期の東京での文脈について再考する契機となった。

4. 「インタビュー桂ゆきの40年」『みづえ』No. 893、1979年8月号 p. 51。

5. 1987年10月4日に板橋区立美術館で行われた桂ゆきと平林薫の対談記録。対談を企画された同館の松岡希代子氏よりご教示いただいた。

小高 日香理

2014年秋、東京都現代美術館ではフランス出身の映像作家ミシェル・ゴンドリー(1963年、ヴェルサイユ生まれ)の日本初個展となる「ミシェル・ゴンドリーの世界一周」展(2014年9月27日～2015年1月4日)を開催した。

ミシェル・ゴンドリーは、「エターナル・サンシャイン」(2004)、「ムード・インディゴ〜うたかたの日々〜」(2013)などの長編映画、ビョーク、ケミカルブラザーズらのミュージックビデオを手がけたことで一般に広く知られ、その独創的な映像表現は多くのクリエイターたちの支持を集めている。

無類の映画愛好家でもあるゴンドリーは、自身の制作活動と並行して、誰もが映画制作を体験できるメソッド「ホームムービー・ファクトリー」を考案し、世界中でワークショップを実施している。本展は、そのワークショップのための「ホームムービー・ファクトリー」エリアと、映像、ドローイング、映画の小道具などを展示する回顧展エリア「Around the World in 19 Videos」の2部構成になっている。

「ホームムービー・ファクトリー」エリアは、シナリオを話し合うための2つの部屋、12の映画セット、映画試写室からなっており、会期を通して映像制作ワークショップが定期的に開催された。東京都現代美術館において、ワークショップを基本とした展示形態は今回が初めての試みであり、多くの課題が発見されるとともにその意義が確認できた。本稿は当館において行われた「ホームムービー・ファクトリー」の簡単な考察を交えた記録である。

1 ホームムービー・ファクトリーの概要

この章ではゴンドリー考案の映画制作メソッド、ホームムービー・ファクトリー(以下HMF)についての概要を説明する。HMF(フランス語で“L'Usine de films amateurs”)は、その名の通りアマチュア映画の工場であり、決められた手順に従っていくと誰でも簡単に短編映画が制作できる(厳密には映画制作における創造的なプロセスに参加できる)。このプロジェクトは、2008年にニューヨークのダイチプロジェクトで立ち上がり^{註1}、パリ、モスクワ、ヨハネスブルグなどさまざまな都市の美術館、アートスペースで実施されてきた。これだけ多くの地域で、さまざまなバックグラウンドを持った人々が(作家のファンでなくとも)ワークショップを楽しめるということの背景には、創造するという行為自体の普遍的な魅力があるだけでなく、制作体験の

クオリティを確保するための統一されたルールがある。ゴンドリーは初期構想から数年をかけて、そのルールや手順の見直しを重ね、HMFのための緻密なインストラクションを作成してきた。開催場所によりフレキシブルになるものもあるが、基本的な制作ステップとルールは以下にまとめられる。(2014年時点)

【映像制作のステップ】

- ①「ワークショップ1」の部屋で大まかなストーリーを考える(45分)
- ②「ワークショップ2」の部屋でその詳細を決め、同時に小道具・特殊効果・衣装を準備する(45分)
- ③撮影セットで「撮影」を行う(1時間)
- ④「試写会」(5-10分程度)

【ルール】

- ・すべての過程を3時間以内に終えること。
- ・5-15人のグループで行うこと(知り合いばかりにならない方が望ましい)。
- ・ジャンル、タイトル、あらすじの順で決めていくこと。この時、発言権は全員にあり、多数決で決めていくこと。
- ・ストーリーは前もって作って来てはいけない。その場で決めること。
- ・カメラマン以外は必ず一度画面に映ること。
- ・役者は自薦でなく他薦で決めること。
- ・撮影は順撮りで一発撮り。リテイク、巻き戻し、編集はしないこと。
- ・撮影に使うセットや衣装は開催地の日常を反映したものであること。
- ・制作後は試写会を行い、DVDをグループの1人が持って帰ること。

当然のことではあるが、これらHMFの決まりには、時間的あるいは技術的制約を差し引いても、通常映画制作プロセスとは決定的に違う部分があつかみられる。その違いこそがゴンドリーがHMFにおいて最も重要視する点であると考えられる。その中でも大事なものが民主主義的な決定のプロセスだ。HMFでは通常映画制作でいう「監督」にあたる役はない。強いて言えばカメラマンの役割を務める人が会議を進行したり、実際の撮影を行ったりするが、あくまでもまとめ役であり、参加

者全員が提案から決定のプロセスに参加することが肝要である。意見が割れたり、まとまらない場合は、二つの提案を折衷させる、それまで意見を出していない人に決定してもらうなどの解決方法が推奨される²²。理由は、それぞれの参加者が気持ちよく参加できるという以外に、三人寄れば文殊の知恵で集団的な想像力が予想外の結果につながる可能性があるためだ。

もちろん、良い結果になるばかりとは限らない。複数の人が意見を出すために設定や物語が支離滅裂になる事もある。しかしそんな未完成さや失敗を楽しむこと、それが更なる創作意欲へとつながっていくことがHMFではより重要であり、作品の出来自体は問われることはない。HMFの真価は成果物ではなく、コラボレーションによる生産活動の過程・経験にあるからだ。

そのような観点からすれば、3時間という時間制限や、編集が行えないなどの技術的制限、また複数人が参加することによる不自由さは、コラボレーションのための条件であり、想像力を刺激する触媒であるともいえる。実際にワークショップを行ってみると「時間をのばしてほしい」「食べ物は持ち込めないの?」「照明を消したいんですが…」などグループの数だけさまざまな意見・要望があった。HMFのルールや美術館の性質上叶えることが難しい要望も多かったが、結果的に映画は撮影され、上映されている。叶えられない要望と同じだけの解決策、代替案、創意工夫がグループごとに生まれていたことがわかる。

また、映画セットに関して「〇〇〇(Gondrier 作品)の映画セットはないのですか?」と尋ねられることがあった。確かに Gondrier の個展であるので、彼の映画の中のような幻想的で奇抜なセットを使っている作品作りを期待する人々がいても不思議ではない。しかし、HMFの撮影セットで用意されている12の場面²³は私たちが普段見かけるような日常的な風景である。例えば、レンタルビデオショップのセットは Gondrier の作品「僕らのミライへ逆回転!」(註1参照)に登場するビデオ屋のものではなく、繭玉飾りのついた、下町の商店街の一角にありそうな佇まいだ²⁴。HMFのルールにもある通り、セットはそれぞれの国や地域のリアリティを反映した風景でなければいけない。セットだけでなく小物、衣装も日常的なものを用意した。



図1
レンタルビデオショップ
撮影：後藤武浩

これにも Gondrier ならではの理由があり、エキゾチックな舞台背景や、奇抜な変装に頼りすぎでは、往々にして物語や世界観がステレオタイプなワンパターンになってしまうからだ。日常空間で起こる非日常が Gondrier 作品の雰囲気のコアとなっているように、普段から馴染み親しみ、観察している風景はさまざまな可能性を秘めたインスピレーションの源泉になりうる。

2 MOTでの開催記録

前章では、HMFの基本的な理念、映画制作ワークショップのステップとルールを記した。実際の運営にあたっては会期中、常に、基本ルールを守るための詳細ガイドラインの追加や、その改善が繰り返し行われた。

本展覧会でのワークショップにはのべ1,804人が参加し、122本の映像作品が制作されることとなったが、今回運営のコアとなってくれたのが100名を超えるボランティアスタッフの方々である。HMFの趣旨やルールを参加者へ説明し、制作を手助けするだけでなく、現場の様子を美術館スタッフへ報告し、対応策や改善策の提案をすることに尽力してくれた。これまでの開催地では、1グループにつき1人のガイドスタッフがいていたが、日本ではその役割をもう少し柔軟に考え、ガイドを1グループ3-4人に増やした。このことにより、ガイドは最低限の説明・補助係というだけでなく、発言を促したり、片付けを手伝ったり、撮影時にはカメラマンやタイムキーパーの補助にまわるなど、効率的かつ臨機応変な動きができるようになった(もちろん映画の内容に口を出すことはない)。このことにより予想外の事態に対処したり、大幅に時間が短縮できるケースもあった。

ここからは、とある日のワークショップを例に実際にどのような映画制作が進められていったかを記していこう。

●集合〜ワークショップ1

この日は小学生のお子さんのいる家族連れを含め、14名の参加希望者が集まった。ワークショップのはじまる15分前に集合してもらい、ガイドスタッフによる趣旨と注意事項の説明の後、自己紹介と撮影セットの見学をする。時間が来たら、映画制作の第一ステップであるワークショップ1の部屋に行き、映画制作の開始だ。ここでは、壁にかけてある制作ステップが書かれたパネル(インストラクションボード)を読みながら、それに従いみんながブレインストーミングをし、作りたい映像の大まかな方向性を決めていく。ここでの制限時間は45分だ。

ワークショップ1の最初のステップでは、以降の話し合いの司会役となる「カメラマン」(実際に撮影もする)、時間を確認し指示を出す「タイムキーパー」(ストップウォッチが渡される)、出された意見を書き出してまとめる「書記」役を決める。それまでガイドスタッフが担っていたファシリテーターの役目は、ここで「カメラマン」に引き継がれる。(元々 HMF が決めたルールではカメラマンは投票で決めるように、という指示があったが、

グループはほとんどが初対面同士であるため、本会場では立候補制とした。）

役割決めが終わると、つくりたい映画のジャンルの提案と決定を行う。なぜあらすじからはじめないかと言えば、ゼロからつくりなければいけないあらすじよりも、ジャンルを先に決めてしまった方が、ある程度方向性が見えてくるからだ。コメディ、ホラー、恋愛ものなど提案を出していき最後は投票で決定する。その際「SF&ロマンス」、「ホラー&ドキュメンタリー」など、二つ以上のジャンルを組み合わせても良い^{註4}。

この回で出たジャンル案は「探偵もの」、「ネイチャーアニメル」(『アニマルプラネット』のような自然番組)、そして「魚釣り」。このグループはこの3つをあわせて映画をつくることにした。

ジャンルが決まると次にタイトルを決めていく。タイトル決めはブレインストーミングに近く、参加者がそれぞれキーワードを提案していき、それを組み合わせてひとつのタイトルにする。既存映画やドラマのパロディもよく使われる手法だ。このグループもいくつか案を出し、最終的には英語圏の参加者から出た案「Who Ate the Fisherman?」に決まった。

いよいよ、あらすじ(起承転結)を決めに入る。全員でアイデアを出し合い、ホワイトボードに書きとめ、いくつかを選んで最終的に8-12個くらいの文章にしていく。これはそのまま、映画のシークエンス(場面)にもなる。

このグループはジャンルのキーワードを忠実に拾い、魚に飲み込まれた釣り人を探して探偵が活躍するストーリーをつくりだした。この時できた文章は以下の通り。

①「漁師が消える」、②「家族が捜す」、③「探偵に依頼する」、④「探偵が調査する」、⑤「(魚の)お腹の中」、⑥「魚のうわさを聞く」、⑦「魚を探しに海へ」。

ここで結末をどうするか、ということになり、これまであまり発言をしていなかった参加者に決定してもらうことにした。結果、釣り人を飲み込んだまま魚が海に消えていくというエンディングになった。以下の場面を書き足していく。

⑧「(魚の)お腹の中」、⑨「海の向こうへ消えていく」

断片的な文章だが、詳細は次のワークショップ2で詰められるので、ある段階でこのように物語をまとめてしまうことが重要だ。

最後にスプレッドシート(映画の骨組みであり脚本の代わりとなるもの)に決定したジャンル、タイトル、あらすじを書き入れてワークショップ1は終了となる。ちなみに、小学生の参加者がいることを考慮して、このグループのスプレッドシートは漢字を使わず書かれていた。

●ワークショップ2

ワークショップ1が終わったら、もしくは45分のタイマーが鳴ったら、隣のワークショップ2の部屋へ移動する。ここは先ほど決めたあらすじの詳細を検討し、役者、衣装、小道具、字幕などを決めたり、必要な物を制作したりするための部屋だ。この部屋の壁にもインストラクションが書かれたパネルが貼ってあるので、読み上げながら、そのステップ通りに進めていく。

まず、スプレッドシートのあらすじ文を書き入れる欄(ワークショップ1で使用)の横に、ロケーションや登場人物の名前、具体的なアクションを書き入れていく欄があるので、メンバー全員で話し合いながらひとつずつ埋めていく。例えばこんな感じだ。

あらすじ：漁師が消える

映画セット：森

行動/場面：魚を釣っている、さけぶ、消える

登場人物名：スズキさん

小道具：釣り竿

字幕：「海の近くのキャンプ場」

ここで注意するのは、行動・場面欄はすべての台詞やト書きを入れられるほど大きくはないので、あくまでも重要なポイントのみを書き込むにとどめるということ。つまり演技はほぼアドリブで行わなくてはならない。

ワークショップ2では、話し合っている段階から、同時進行で役者決め、衣装決め、字幕・小道具制作なども行う。部屋には色紙や新聞紙、マーカー、紐などちょっとした文房具が置いてあり、このグループも小道具と字幕を必要なものからどんどん作りはじめていた。字幕というのは、タイトルやエンドロールの他、「昔々あるところに…」 「それから半年後」 など場面を説明するときに表示するものだ。今回は映画セットに「海」がないので、最初の字幕で「海の近くのキャンプ場」と表示し、森(キャンプ場)のセットで魚釣りをするというシーンに繋げることができた。しかし、この後の魚に飲み込まれた後の魚のお腹の中のシーン、そして魚が海に帰っていくシーンをどう表現するか？

そこで再び案を出しあい、魚のお腹に人がいるシーンは、画用紙いっぱい描いた魚のお腹部分をくり抜いて、その中に人を映すことで表現することにした。海のシーンはゴミ捨て場にあったブルーシートを活用し、その上に魚を泳がせようということになった。

そうしてスプレッドシートが埋まり、小道具と字幕を準備し、役者が衣装に着替えたなら、いよいよ撮影セットに入って撮影となる。

●撮影～試写会

撮影時間は1時間。カメラマンが操作するスイッチはハンディカメラのオンとオフ、場合によってはズーム、この3つだけだ。フレーム内に映ったものがそのまま映像となる。

ワンカットずつ順撮り&一発撮りとなるので、撮影前にロケ場

所を整えておくこと(小道具を配置する等)、直前に1-2回りハーサルをしておくことが必要だ。映画セットには参加者以外の見学者もいるので、撮影時はカメラマン、メンバー、そしてスタッフが声をかけて、役者以外は画面内に入らないように、また音を出さないでいてもらうよう協力をあおぐ。カメラマンがスイッチの切り替えタイミングやパンのシミュレーションをし、役者が演技のリハーサルを終えたら本番カット撮影開始。それを繰り返して、最終的には、10-20カット程で構成された3-5分くらいの作品になる。

撮影が終わると、スタッフがカメラを預かり試写会の準備をする。その間の15-20分ほどで、参加メンバーはワークショップの部屋に戻り、映像のためのDVDジャケットを制作する。必須情報であるタイトル、日付、通し番号が入っていれば後は自由なので、折り紙や雑誌の切り抜きを使ったり、制作した字幕や小道具を再利用したりして、自由に作ってもらう。いっぺんに全員でできる作業ではないので、得意なメンバーが代表して作ったり、子どものメンバーに作ってもらったり、順番に感想やサインを書き入れたり、やり方はさまざまだ。

Fishermanチームは、雑誌に載っている海の写真や時計の広告の切り抜き(時計ののっている青のサテンを海に見立てたようだ)に、子どもたちが書いた魚やタコ、カニの絵をコラージュしてジャケットを完成させた。出来上がったジャケットは、レンタルビデオ店のセットの中に置かれる。^{10, 11}

その後は、上映室に移動して撮影したばかりの映像の試写会を行う。部屋は30脚ほどの椅子があり、参加メンバーでない人も見学ができる。その日も、多くの見学者が集まってきた。上映が始まると、失敗テイクに笑ったり、迫真の演技や特殊効果に歓声が上がったりと試写会はかなりにぎやかになる。これはほんなにシャイなグループでもそうだ。

今回できた映画はこのようにまとまっていた。

Who Ate the Fisherman? (タイトル画面)¹²

「海の近くのキャンプ場」(字幕)で、釣り人が釣りをしていると大物の手ごたえ¹³。釣り人はひっぱられて海に落ちてしまう(画面から消える)。失踪した釣り人を探しに家族がキャンプ場へやってきて、釣り竿と靴を発見する。

場面代わってホームズ探偵事務所¹⁴。電話で釣り人の家族から捜索依頼を受けたホームズさんと少年探偵団は調査を開始する。カフェや路地裏で聞き込みをするが、手がかりは見つからない^{15, 16}。

「いっぽう この頃 おなかの中では…」(字幕)。魚に飲まれた釣り人の視点になり、真っ暗な様子が映し出される(カメラを手で覆っている)。「ここはどこだろう…」

再び場面が変わってゴミ捨て場¹⁷。探偵たちは、その段ボールハウスを根城にしている「オヤジ」から有力な情報を得る。「その森には巨大な魚が出没する。昔そいつと闘って私は腕を失った…探しに行こう!」。探偵たちはオヤジの案内で森にたどり着く。

しばらく探すが手がかりはない。そこで一人が閃いた。もし釣り人が魚に飲みこまれていたら、携帯電話も魚の腹の中のはず…着信音で魚の居場所を探るため、釣り人の携帯に電話を掛けてみる。そして電話はつながり…ホームズさんは驚きの声をあげる。

なんと、当の釣り人は快適な魚の体内での生活(ベッドルーム付)を満喫していた¹⁸。

「ずっとここにいたいので、もう探さないでください」

巨大魚はそのまま大海原(ビニールシート)を、仲間の魚たちと一緒に泳いで去っていく¹⁹。

エンドロール、タイトルが出て終幕。

上映会が終わると、スタッフから参加者の一名にコピーしたDVDを渡す。これには、縁のあった参加者同士が連絡を取り合うきっかけになれば、というゴンドリーの思いがある。メンバーが連絡先を交換しあい、「お疲れ様でした!」の挨拶でHMFのワークショップは終了となる。緊張が解けたのか、この段階ではどのグループも笑顔と歓声につつまれていた¹¹。

3 「今あるもの」から生まれる映像の魔術

前章で例にあげたグループは、釣り人が魚に飲み込まれるという特殊な設定を「ブルーシートによる海の見立て」と「魚の書き割りをつくり、くり抜いた部分に人物を映す」という2つの手法で実現した。そして、受け手側(映画を見る側)も、それを「海」、「魚の腹の中の様子」として読み取り、この映画は成立している。

このように、用意できるものや利用できる技術に不足がある場合、参加者自身がその代替案を考え、目の前にある素材を利用してフレーム内の仕掛け(In-camera effect)を作っていくことになる。場合によってはこのような仕掛けは、撮影時にはその効果がまいわからないが、実際の映像を見ると、カメラを通して遠近感がフラットになったり、不要な部分が映らなかったりするおかげで「それらしく」見えることも多い。

簡単な例だと、瞬間移動、消失、出現トリックがある。カメラをいったん停止させ、その間に物や人物を動かしてから再度録画を開始することで、道具やキャラクターが瞬間移動したり、現れたり、消えたりするように見える仕掛けである。映画史の中でも古くから使われている特殊撮影技術だ。

その他、ほんの一部であるが会期中に使われた仕掛けを紹介する。

・書き割りフレームの使用

前述した例のように、画用紙などで中をくりぬいた枠組みを作り後ろの風景に重ねる手法。テレビの中や別の世界を表現することができる。



図2
タイトル



図7
ゴミ捨て場



図3
キャンプ場の釣り人



図8
魚の中で



図4
探偵事務所

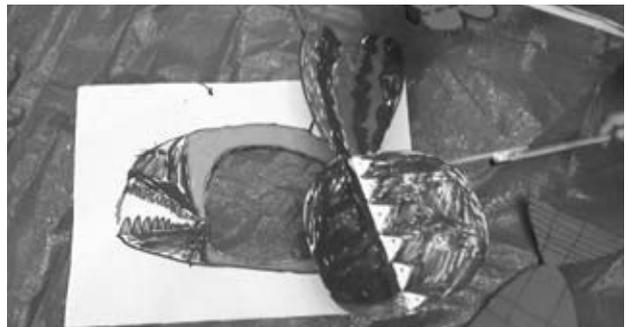


図9
海へ



図5
カフェで聞き込み

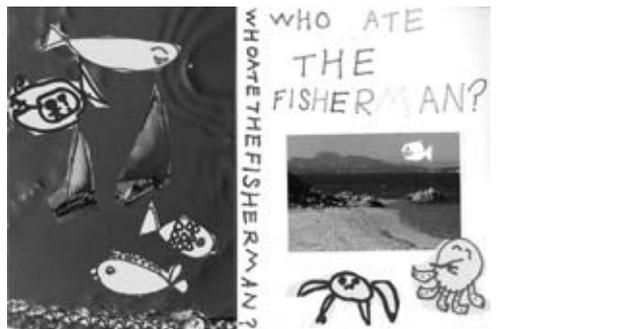


図10
DVDジャケット



図6
路地裏で聞き込み



図11
ビデオショップの棚
撮影：後藤武浩

・遠近法を使った撮影

手や顔、人形などを前景に置くことで、後景の人物や物と比べ巨大化させて見せる。

・透明フィルムの使用

透明なシートにポスカや色紙で文字や絵を描き入れ、風景の上に重ねる手法。また、透明シートの全面に色を塗りカラーフィルムとしてカメラレンズの前に置いて撮影することもできる。

これらのアナログな映像トリックはゴンドリーの作品、彼が影響を受けているジョルジュ・メリエスの作品を思い起こさせる。参加者の中にはメリエスやゴンドリー映画のファンもいて、積極的にこのような特殊な撮影方法に挑戦しようとするケースもあった。しかしもちろん、ほとんどの参加者は、イメージする場面を今あるものと技術で表現しようとして結果的にゴンドリー的な映像トリックにいきつく。もしワークショップ1のあらすじを決めていく段階で、必要なセットがないことや、編集・CG合成ができないことを意識していたら、参加者は自分たちが本当にやりたいことを我慢して、無難に実現可能な範囲の舞台設定とストーリーを選んだらどうか？参加者が一人だけであれば、もしくはごく少数であればそうであったかも知れない。HMFで設定されているワークショップ人数の5-15人のグループとは絶妙な数字だ。特殊な撮影が必要な、予期しない突飛な方向へストーリーが向かう可能性も上がるが、その実現に向けてのアイデアが出る可能性も高まる。しかも、「みんなでやれば怖くない」と思い切って挑みやすい。

実際、東京都現代美術館での実施では、ワークショップが始まる前にセットの見学はすませており、ガイドスタッフから順撮りで編集がないことも説明していたが、それでも参加メンバーからは次々と斬新なアイデアが出てきた。前述したように時間や技術や備品の不足は表現を制限する要因ではなく、むしろさまざまな表現方法を引き出すこととなった。

わかりやすい例として、会期中一番の人気だった「ゾンビ」もののモンスター表現のバリエーションがあげられる。会場にはゾンビマスクもないし、血のりもドーランも用意していない。参加者は古典ゾンビ映画の動きのコードを踏襲して「ノロノロ歩く」「髪を振り乱す」他に、「服を乱して着る」「目の下にクマのようなパーツをつける」「画用紙やモールで血をつくる」「ドクロのお面をつくってかぶる」など、作品の数だけゾンビ表現を生み出した。特殊マスクがあれば、そればかり利用されて画一的なゾンビ像になっていただろう。ゴンドリーが、映画セット、衣装や小道具を、最低限の日常的なものに限っている理由はそこにある。想像力は日常から生まれ、創造力は不足の中で発揮される。そして作品を見る方もまた、謎解きをするように映画を能動的に楽しむことができる。

4 東京での実施を終えて—HMFのこれから

2014年の日本の参加者たちの様子、作品をゴンドリーがどのように捉えていたか、振り返ってみる。彼が指摘した点は主に以下の二つである。

「その他の会場の参加者に比べ、日本の参加者は意見を出す時に少しシャイな人が多い。でもきっかけがあれば大胆なことができる」

「撮影が上手すぎる。プロが混ざっているんじゃないかと思ったよ」

前者はある程度予想はしていた。確かに参加者の中には、まれにはあるが、最初の役割決め段階から沈黙が続いてしまうグループもあった。元々のHMFのメソッドは、積極的に意見を出していける人々が多くいてスムーズに進んでいくものだ。今回日本での実施にあたり、ルールの変更や追加、ガイドスタッフの役割を見直したのは、気軽に意見をだせるようにするためでもある。

一方、後者は全くの予想外の意見だった。ゴンドリーからは「アマチュアのためのワークショップなのに趣旨を勘違いしていないか？」と誤解を受けそうになったくらい日本の作品は出来の良いものが多かったらしい。たまには、もちろん、カメラのON/OFFスイッチを間違えてメイキングを撮影してしまったり(ゴンドリー自身もかつて同じミスをしている)、さまざまなミスがあることは間違いないのだが、全体を通して日本の参加者の映像は「出来すぎている」と思ったようだ。

そう思った主な理由は手振れの少ないカメラワーク、構成が練られたカット割が多い、ということだった。もともと手振れの非常に少ないハンディカムを使っていることに加え、文字通りホームムービー(家庭の映像)を撮り慣れている子どものいる層や、スマートフォンの映像アプリでの撮影を手軽に楽しんでいる若者層の参加が多かったのも原因のひとつかも知れない。このように、参加したメンバーの何人かには、思い出作りであれ暇つぶしであれ、撮影する/撮影される行為が何らかの形で日常の一風景になっていた可能性はある。ゴンドリーがフィルムに初めて触れた少年時代と比べれば格段に、日頃から動画撮影、もしくはそれに準じた撮影行為を楽しんでいる人は増えていだろう。また、ビデオゲーム、動画サイトの映像や漫画からカット割りや演出のヒントを得ることもあるかも知れない。娯楽を作る/視聴するためのツールが簡単に手に入るようになった今、HMFの考案された当時とアマチュアという感覚に大きな隔りがある。未経験、純粹、不器用といったステレオタイプ的なアマチュア像から私たちは脱却する時だということだろうか。

2016年2月現在までに10都市で開催されているHMF²⁵。ニューヨークでの初開催からおよそ6年が経ち、ゴンドリー自身

もHMFの発展に向けて、会場での制約や参加者の特性などを考慮した、フレキシブルなあり方を構想中であるという。例えば12の撮影セットを用意できない環境であれば、規模を縮小して実施できるようにする、といった具合だ。開催される土地が変わり時代が変われば、HMFのステップや細かい決まりもそれに即して変化してゆくのが自然な形なのかも知れない。しかしHMFのコアである「誰もが表現する権利と義務を持っていること、皆でクリエイティブなプロセスを楽しむこと」という理念は変わることはない。

創作のためのツールが安価になり、ネットが表現の場を提供した結果、誰もがより手軽に創作活動を楽しめるようになった。そんな時代だからこそ、HMFはバーチャルではない協働的創造の場／発表の場として、その重要性を増していくのではないだろうか。

これからのHMFの世界各都市での継続的開催、そして2016年5月パリ郊外のオーベルヴィリエに完成予定のHMF常設施設の始動が期待される。

註

1 2008年は、ゴンドリーが監督・脚本を手がけた長編映画「僕らのミライへ逆回転」(2008)が公開された年でもあり、この映画にはHMFのベースとなる要素が詰まっている。

「僕らのミライへ逆回転」(原題BE KIND REWIND) 監督・脚本：ミシェル・ゴンドリー、出演：ジャック・ブラック、モス・デフ。2008年、アメリカ。ジャック・ブラック演じる主人公が、ひよんな事故でレンタルビデオ店のビデオをダメにしまい、親友と一緒に町中を巻き込んで「ゴーストバスターズ」や「2001年宇宙の旅」といった名作映画たちをリメイクしていく。

2 ゴンドリーがこのような民主主義的ルールを作るに至ったエピソードがある。ある日、ビデオカメラを12歳の息子に貸してあげると、友達同士で映画撮影ごっこを始めた。しかし、誰のアイデアを採用し、誰がカメラマンをするのかで揉めてしまい、なかなか撮影が進まなかった。そのためHMFでは全員が平等に発言し、制作に参加できるように民主主義的ルールをつくった。(2014年11月3日東京都現代美術館でのアーティストトークより)

3 レンタルビデオ店、レストラン(カフェ)、車、半分の車、路地裏、電車内、家、森(キャンプ場)、ミニチュアの車、ミニチュアの電車、ゴミ捨て場、事務室(医務室/交番にもなる)。

4 ちなみに本会場で圧倒的な人気があったジャンルはホラー(特にゾンビもの)と、マフィア(任侠)ものであり、一般的に低予算で制作できるとされる映画の代表ジャンルと一致していたのが興味深い。ある程度物語にフォーマットがあり、キャラクターのステレオタイプが生かせるところが人気なのかも知れない。

5 Deitch Projects (ニューヨーク、2008年)、Musée de l'Image et du Son (サンパウロ、2008年)、Centre Georges Pompidou (パリ、2011年)、Film Festival Rotterdam (ロッテルダム、2012年)、Centre de Culture Contemporaine "Garage" (モスクワ、2012年)、Museum of African Design(ヨハネスブルグ、2012年)、La Fabrique culturelle des anciens abattoirs de Casablanca (カサブランカ、2014年)、東京都現代美術館(東京、2014年)、Palais des Festivals(カンヌ、2015年)、La Condition Publique (ルーベ、2015年)

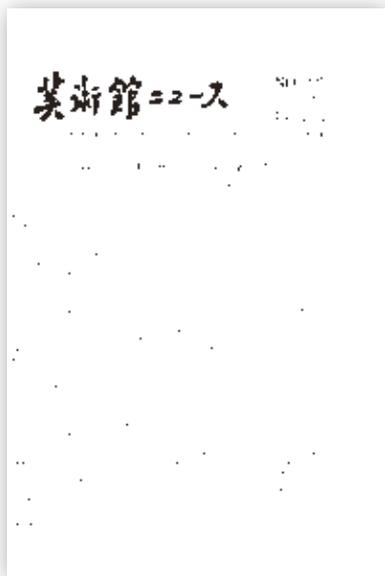
*以上すべてL'Usine de films amateurs 公式ホームページによる

『美術館ニュース』(東京都美術館発行) 総目次(4)

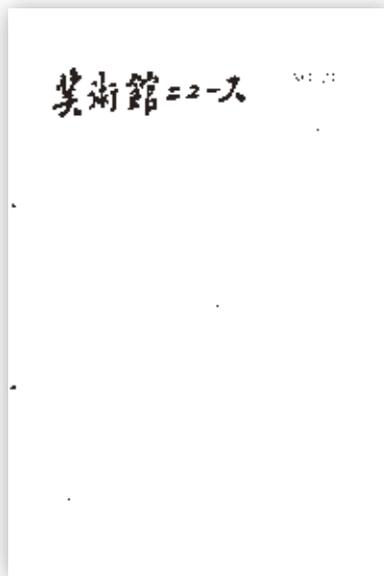
長谷川菜穂 編

今回は昭和44(1969)年6月発行の221号から昭和48(1973)年7月発行の270号までの総目次を掲載する。

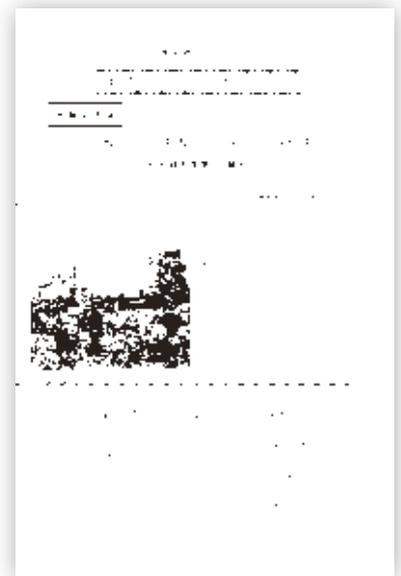
『美術館ニュース』の書誌情報については、研究紀要第15号(2013年3月発行)に掲載されている総目次(1)を参照のこと。



美術館ニュース221号(昭和44年6月15日発行)



美術館ニュース241号(昭和46年2月15日発行)



241号 佐藤記念室陳列案内

凡例

- ・本目次は『美術館ニュース』(東京都美術館刊)第221号(昭和44年6月)から第270号(昭和48年7月)までの各号の総目次である。
- ・本目次の表記は、原本見出しをもとに作成し、不足箇所や原本見出しに示されていないものは、本目次作成者が補足し、[](角カッコ)で括った。
- ・東京都美術館と美術団体の活動に関係する見出しを中心に記し、友の会についての記述は誌面の都合上省略した。
- ・本目次では旧漢字は常用漢字に改めたが、旧仮名遣いは原本のままとした。
- ・数字は算用数字に統一した。
- ・図版と写真については必要と思われるもののみ記した。

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数		
No.221 (6月号)	昭和44年6月15日	現代美術と美術館	乾由明	1		
		飛騨	森田茂	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		東京都美術館運営審議会委員さま				
		5月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		6～7月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第22回創造展、第25回現展、第41回新構造社展、第49回朱葉会展、第23回前衛美術展、第11回日本総合書芸院展、第9回日本書鏡院展、第18回日本書道院展、第21回書道同文会展、第30回大日本書芸院展				
		美術館の外と内	隈元謙次郎	1		
		ふるさとの自然美	高野真美	4		
No.222 (7月号)	昭和44年7月15日	【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		昭和44年度下半期(9月～3月)使用割当決定				
		6月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		7～8月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		個人消息		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第21回毎日書道展、第4回瑞雲書道会展、第13回東方書道院展、第9回現日書道展、第19回台東書道展、第18回書海社展、第17回書星会展、第17回平和美術展、第19回書芸文化院展、第20回玄友会展				
		彫刻と日本の美術市場	土方定一	1		
		No.223 (8月号)	昭和44年8月15日	【美術館よりのお知らせ】		3,5-6
				佐藤記念室「東京都美術館所蔵人物画展」を開催(9月)-昭和44年度第2回陳列-		
図版：《自画像》佐伯祐三、《ぶどう》東郷青児						
新収蔵美術品紹介(昭和44年度-1)						
図版：《花と鳥》森白甫、《遠望》互井開一						
昭和44年度日展要綱						
上野付近の石造美術	石井鶴三			4		
7月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
美術団体告知板(新美術協会、春陽会、新協美術会、新象作家協会、新世紀美術協会、前衛美術会、創元会、モダンアート協会、奎星会、謙慎書道会、全日本学生書道連盟)				7		
8月～9月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
No.224 (9月号)	昭和44年9月15日	個人消息		7		
		【鑑賞の手引き 都美】		2		
		第13回玄海全国書道展、第54回二科美術展、第54回日本美術院展、第24回行動美術展				
		題名物語	本間正義	1		
		CALAIS	野村守夫	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		佐藤記念室「東京都美術館所蔵人物画展」を開催中				
		8月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		9月～10月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		個人消息、展覧会レポート		6,8		
No.225 (10月号)	昭和44年10月15日	【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第31回一水会展、第15回一陽会展、第33回新制作協会展、第37回独立美術展、第33回自由美術展、第23回二紀会展				
		【鑑賞の手引き その他】		3		
		ヘンリー・ムーア展(東京国立近代美術館)				
		新日展の発足について	山崎覚太郎	1		
		ルクセンブルグへの旅	阪倉宜暢	3		
		身辺雑感	杉原元人	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		皇太子殿下ご夫妻展覧会をご鑑賞、秋の公募展受賞者一覧				
		写真：二科会彫刻部の作品をご覧になる両陛下				
9月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8				
美術団体告知板(行動美術協会、光陽会、新協美術協会、第一美術協会、日本版画協会)		8				
10月～11月の展覧会[団体展スケジュール]		8				
展覧会レポート		8				
【鑑賞の手引き 都美】		2				
改組第1回日展						
【鑑賞の手引き その他】		2				
18世紀フランス美術展(国立西洋美術館)						

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数		
No.226 (11月号)	昭和44年11月15日	エコール・デュ・ルーヴル-フランスの美術館員養成機関-	長谷川栄	1		
		【美術界の動き】		3		
		文化勲章・功労者決定				
		版画についての雑感	高橋力雄	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		収蔵美術品紹介(昭和44年度-2)-都知事室から所属換え、秋の公募展受賞者一覧、改組第1回日展受賞者一覧				
		10月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		美術団体告知板(一線美術会、国画会、主体美術協会)		8		
		11月～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		展覧会レポート		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2		
		第8回文化書道展、第33回大潮会展、第36回書壇院展				
		【鑑賞の手引き その他】		3		
浅井忠名作品展(ブリヂストン美術館)						
No.227 (12月号)	昭和44年12月15日	見方・見せ方	倉田公裕	1		
		デッサンとヴァーナル	里見勝蔵	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		芸術院新会員決定、新収蔵美術品紹介(昭和44年度-3)、昭和45年度上半期(4月～8月)都美術館使用割当決定				
		図版：《音》児玉三鈴、《浅春》田村一男				
		11月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		美術団体告知板(新興書道展、玄友会、二科会)		8		
		12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		個人消息、展覧会レポート		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第24回日本書道美術院展、第11回太玄会展、第9回日本書学院展、第18回独立書展、第12回東京書道会展、第19回奎星会展、第18回回瀾会展、第19回高風会書道展、第11回新興書道展、第18回清真会展				
		No.228 (1月号)	昭和45年1月15日	年頭所感	今井治夫	1
				幼年時代からの思い出	北村西望	4
【美術館よりのお知らせ】				5		
新収蔵美術品紹介(昭和44年度-4)						
図版：《嶺》山田申吾、《麒麟》加山又造、《インドの女》南政善、《初秋》江藤哲						
12月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
美術団体告知板(女流画家協会、新象作家協会、独立美術協会)				8		
1月～2月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
展覧会レポート				8		
【鑑賞の手引き 都美】				2-3		
第23回書道芸術院展、第32回謙慎書道会展、第18回大東書道展、第6回創玄書道会展、第17回日本画府展、第23回日本アンデパンダン展(日本美術会展)、第14回新槐樹社展、東京芸術大学昭和44年度卒業・修了作品展						
No.229 (2月号)	昭和45年2月15日			現代工芸界への私感	吉田耕三	1
				三宅島の記	平松讓	4
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		「東京都美術館所蔵工芸展」を開催中[出品目録](昭和44年度第3回陳列)				
		1月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		2月～3月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第9回大調和会展、第10回日本南画院展、第20回一線美術展、第30回美術文化展、第15回新世紀美術展、第13回新協美術会展、第22回三軌会展、第29回水彩連盟展、第23回示現会展、第46回白日会展				
		No.230 (3月号)	昭和45年3月15日	美術館の基準	中島俊教	1
				東北紀行	木村辰彦	4
				【美術館よりのお知らせ】		5-6
				新収蔵美術品紹介(昭和44年度-5)		
				図版：《九龍壁》西山英雄、《猛》山口華揚、《仔鹿》山本倉丘、《ブティ氏像》石井柏亭、《シャベル》岡田又三郎、《黒衣の像》高光一也、《H老人の首》堀進二、《布目象嵌鉄皿》大須賀喬		
2月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
3月～4月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞の手引き 都美】				2-3		
第20回1970モダンアート協会展、第38回日本版画協会展、第56回光風会展、第29回創元会展、第18回日彫展、第36回東光会展、第44回国画会展、第47回春陽会展						

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数		
No.231 (4月号)	昭和45年4月15日	絵画と国境-ソ連東欧の旅から-	豊田穰	1		
		【美術界の動き】		3		
		国宝、重要文化財など新指定				
		日本南画と国際交流	河野秋邨	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		昭和44年度年間入場者数、昭和44年度文化勲章受章者、文化功労者、日本芸術院会員就任祝賀会開催、佐藤記念室「昭和43・44年度新収蔵作品展」を開催[出品目録]（昭和45年度第1回陳列）、新収蔵美術品紹介(昭和44年度-6)				
		写真：集合写真1枚				
		図版：《おくのほそ道》羽石光志、《化石帯》高橋節郎				
		3月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		4月～5月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
No.232 (5月号)	昭和45年5月15日	困ったこと	安井収蔵	1		
		ナホトカ	上田哲農	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		佐藤記念室「昭和43・44年度新収蔵作品展」を開催中、新収蔵美術品紹介(昭和44年度-7)				
		図版：《映》高山辰雄				
		4月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		5月～6月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		展覧会レポート		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第24回女流画家協会展、第66回太平洋美術会展、第19回創型会彫塑展、第6回主体美術協会展、第20回新興美術院展、第18回光陽会展、第24回霹靂社展、第13回新象作家協会展、第58回日本水彩画会展、第17回新美術協会展				
No.233 (6月号)	昭和45年6月15日	前衛美術と常識	瀧梯三	1		
		水郷	田中実	4		
		【美術館よりのお知らせ】		7		
		佐藤記念室「昭和43・44年度新収蔵作品展」を開催中				
		5月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		6月～7月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第26回現展、第42回新構造社展、第50回朱葉会展、第24回前衛美術会展(勲展)、第12回日本総合書芸院展、第10回日本書鏡院展、第19回日本書道院展、第22回書道同文会展、第31回大日本書芸院展				
		No.234 (7月号)	昭和45年7月15日	芸術と風俗と商品と	北村由雄	1
				国立公園の脇路	秋保正三	4
【美術館よりのお知らせ】				5-6		
昭和45年度下半期(9月～3月)東京都美術館使用割当決定、佐藤記念室「昭和43・44年度新収蔵作品展」を開催中						
6月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				7		
7月～8月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞の手引き 都美】				2-3		
第22回毎日書道展、第14回東方書道院展、第10回現日書道展、第19回書海社展、第18回書書会展、第18回平和美術展、第20回書芸文化院展、第21回玄友会展						
No.235 (8月号)	昭和45年8月15日			飛鳥の里にて	日野耕之祐	1
				【美術館よりのお知らせ】		3,5-6
		10月から「東京都美術館所蔵風景画展」を開催(昭和45年度第2回陳列)、東京都美術館所蔵美術品紹介(1)「日本画」[作品目録]、昭和45年度日展要綱				
		図版：《新涼》辻永、《ついで晴れの鏡容池》黒田重太郎				
		伊豆富戸海岸	大島士一	4		
		7月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		美術団体告知板(自由美術協会、新象作家協会、新制作協会、全日本職場美術協議会、モダンアート協会、書道同文会、新興書道展、春陽会、二紀会)		7		
		8月～9月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		展覧会レポート		7		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
第14回玄海全国書道展、第55回二科美術展、第55回日本美術院展、第25回行動美術展						
No.236 (9月号)	昭和45年9月15日	真夏の夜の夢	小川正隆	1		
		夏のアフガニスタン	平山郁夫	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		佐藤記念室「東京都美術館所蔵風景画展」を開催[出品目録]				
		8月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		9月～10月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		展覧会レポート		6		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第32回一水会、第16回一陽会、第34回新制作協会展、第38回独立美術展、第34回自由美術展、第24回二紀会展				
		【鑑賞の手引き その他】		3		
鈴木春信展(東京国立博物館)、ミレー展(西武百貨店渋谷店)						

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数		
No.237 (10月号)	昭和45年10月15日	明治洋画と二人の教師	鈴木敬	1		
		谷川岳	庄司栄吉	3		
		福島文化センター開館に寄せて	中野蒼穹	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		皇太子殿下ご夫妻展覧会をご鑑賞、秋の公募展受賞者一覧				
		写真：院展を鑑賞する両陛下				
		9月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		美術団体告知板(一線美術会、東光会、日本総合書芸院)		8		
		10月～11月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		個人消息、展覧会レポート		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2		
		第2回日展				
		【鑑賞の手引き その他】		2		
英国風景画展(国立西洋美術館)						
No.238 (11月号)	昭和45年11月15日	最後の展覧会	藤田昌司	1		
		【美術界の動き】		3		
		文化勲章・功労者決定、秋の公募展受賞者一覧				
		灯台	江藤哲	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		東京都美術館所蔵美術品紹介(2)「油絵」(1)[作品目録]、佐藤記念室「東京都美術館所蔵風景画展」を開催中、第2回日展受賞者一覧				
		10月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		美術団体告知板(台東書道連盟)		8		
		11月～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		個人消息、展覧会レポート		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2		
		第34回大潮会展、第37回書壇院展				
		No.239 (12月号)	昭和45年12月15日	古文化財の複製を	谷尾襄	1
スケッチの旅の怪	小堀進			4		
【美術館よりのお知らせ】				5-7		
新収蔵美術品紹介(45年度-1)、芸術院新会員決定						
図版：《白濤》三輪晃勢、《夕立》梶原緋佐子、《双鯉》浜田観、《樹》猪原大華、《三人のモデル》北沢映月、《流人島》森田曠平、《朝》富取風堂、《塔のある街》児玉幸雄						
11月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞の手引き 都美】				2-3		
第25回日本書道美術院展、第12回太玄会展、第19回独立書展、第20回奎星会展、第19回回瀾会展、第20回高風会書道展、第12回新興書道展、第19回清新会展						
No.240 (1月号)	昭和46年1月15日			新春雑感	今井治夫	1
				東京都美術館の改築について	有島生馬	4
				【美術館よりのお知らせ】		5-6
				昭和46年度上半期(4月～8月)都美術館使用割当決定、新収蔵美術品紹介(45年度-2)		
		図版：《山嶺》塩出英雄、《駅頭の夕暮》平松譲、《夕》三谷十糸子				
		12月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		美術団体告知板(第一美術協会、モダンアート協会、文化書道会)		8		
		1月～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		展覧会レポート		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第24回書道芸術院展、第33回謙慎書道会展、第19回大東書道展、第18回日本画府展、第24回日本アンデパンダン展(日本美術会展)、第15回新槐樹社展、東京芸術大学昭和45年度卒業・修了作品展				
		No.241 (2月号)	昭和46年2月15日	マネのダンディズム(粋好み)	柳亮	1
				セゴビア巡礼記	勝一晃	4
【美術館よりのお知らせ】				5		
鹿子木孟郎《関東大震災の図》展を開催中(昭和45年度第3回陳列)						
図版：《大正12年9月1日》鹿子木孟郎						
1月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				7		
2月～3月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞の手引き 都美】				2-3		
第10回大調和会展、第11回日本南画院展、第21回一線美術展、第31回美術文化展、第16回新世紀美術展、第14回新協美術会展、第23回三軌会展、第30回水彩連盟展、第24回示現会展、第47回白日会展						
No.242 (3月号)	昭和46年3月15日			新人	田近憲三	1
				メキシコの旅	深谷徹	4
				【美術館よりのお知らせ】		5-6
				新収蔵美術品紹介(45年度-3)、東京都美術館所蔵美術品紹介(3)「油絵」(2)[作品目録]		
		図版：《暁光》川本末雄、《黄衣》加藤晨明、《最涯ての道》加藤東一、《富士》福王寺法林				
		2月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		3月～4月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		展覧会レポート		7		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第39回日本版画協会展、第57回光風会展、第30回創元会展、第1回日彫展、第37回東光会展、第45回国画会展、第48回春陽会展				

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数		
No.243 (4月号)	昭和46年4月15日	美術の恩恵	関忠夫	1		
		【美術界の動き】		3		
		重要文化財新指定、芸術院賞決定				
		隠岐の島あれこれ話	川上耐平	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		昭和45年度年間入場者110万人を越す、昭和45年度文化勲章・文化功労者・日本芸術院会員就任者祝賀会開催、佐藤記念室「昭和45年度新収蔵作品展」を開催(昭和46年度-1) [出品目録]、新収蔵美術品紹介(45年度-4)				
		図版：《雪国》村松乙彦、《茶室》中島多茂都				
		写真：文化勲章・文化功労者・日本芸術院会員就任祝賀会集合写真				
		3月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		4月～5月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
【鑑賞の手引き 都美】		2-3				
第31回日本画院展、第40回朔日会展、第11回現代日本美術展、第42回第一美術展、第37回旺玄会展						
No.244 (5月号)	昭和46年5月15日	初夏の野尻湖と黒姫高原	藤本東一良	1		
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		東京都美術館運営審議会委員決定、佐藤記念室「昭和45年度新収蔵作品展」を開催中(昭和46年度-1)、新収蔵美術品紹介(45年度-5)				
		図版：《沼》池田遙邨、《春望》郷倉和子、《四季の花》片岡球子、《残雪》今野忠一				
		4月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		5月～6月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		個人消息、展覧会レポート		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第25回女流画家協会展、第67回太平洋美術会展、第20回創型彫塑展、第7回主体美術協会展、第21回新興美術院展、第19回光陽会展、第25回霹靂社展、第14回新象作家協会展、第59回日本水彩画会展、第18回新美術協会展				
		No.245 (6月号)	昭和46年6月15日	ゴッホの復活	坂崎乙郎	1
故宮博物館と太魯閣渓谷(1)	山田申吾			4		
5月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
6月～7月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞の手引き 都美】				2-3		
第24回創造展、第27回現展、第43回新構造社展、第51回朱葉会展、第2回齋展(前衛美術協会展)、第13回日本総合書芸院展、第11回日本書鏡院展、第20回日本書道院展、第23回書道同文会展、第32回大日本書芸院展						
No.246 (7月号)	昭和46年7月15日			美術館活動の問題点	三木多聞	1
				故宮博物館と太魯閣渓谷(2)	山田申吾	4
				【美術館よりのお知らせ】		5-7
				昭和46年度下半期(9月～3月)東京都美術館使用割当決定、佐藤記念室「昭和45年度新収蔵作品展」(昭和46年度-1)、新収蔵美術品紹介(45年度-6)		
		図版：《あふさかの関》日比野五鳳、《知床》(自詠歌)金子鶴亭				
		6月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		7月～8月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第23回毎日書道展、第15回東方書道院展、第11回現日書道展、第20回書海社展、第19回書星会展、第19回平和美術展、第21回書芸文化院展、第22回玄友会展				
		No.247 (8月号)	昭和46年8月15日	残暑のつぶやき	嘉門安雄	1
【美術館よりのお知らせ】				3,5-6		
佐藤記念室「昭和45年度新収蔵作品展」を開催中(昭和46年度-1)、新収蔵美術品紹介(45年度-7)、東京都美術館所蔵美術作品紹介(4)「油絵」(3) [作品目録]、昭和46年度日展要綱						
図版：《スワネチアの若者》上田哲農						
マーサスベニア個展回想記	水船六洲			4		
7月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
美術団体告知板(新美術協会、光陽会、自由美術協会、春陽会、新協美術会、新制作協会、第一美術協会、官公書道連盟、瑞雲書道会、太玄会)				7		
8月～9月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
展覧会レポート				7		
【鑑賞の手引き 都美】				2		
第15回玄海全国書道展、第56回二科美術展、第56回日本美術院展、第26回行動美術展						
No.248 (9月号)	昭和46年9月15日	美術館というもの	倉田公裕	1		
		山と海にて	山本日子士良	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		東京都美術館所蔵美術作品紹介(5)東京都立駒場高校からの所属換え牧野虎雄作品 [作品目録]、新収蔵美術品紹介(46年度-1)				
		図版：《木の実の夢》帖佐美行、《万葉一首》鈴木翠軒				
		8月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		7		
		展覧会レポート		6		
		9月～10月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3		
		第33回一水会展、第17回一陽会展、第35回新制作協会展、第39回独立美術展、第35回自由美術展、第25回二紀会展				
【鑑賞の手引き その他】		3				
若冲展(東京国立博物館)、ローマ・バロック展(国立西洋美術館)						

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.249 (10月号)	昭和46年10月15日	視覚上の虚像	西田正秋	1
		三階の滝を訪ねて	高橋澄爽	3
		蔵の中にて	市橋敏雄	4
		【美術館よりのお知らせ】		5-6
		皇太子殿下ご夫妻展覧会をご鑑賞、秋の公募展受賞者一覧、新収蔵美術品紹介(46年度-2)		
		図版：《石狩の男》森野圓象、《供宴》和田金鋼		
		9月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		個人消息		8
		10月～11月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		【鑑賞の手引き 都美】		2
		第3回日展		
【鑑賞の手引き その他】		2		
ルノワール展(西武百貨店池袋店)				
No.250 (11月号)	昭和46年11月15日	一つの提案-絵の寸法規格の改正-	植村鷹千代	1
		【美術界の動き】		3
		昭和46年度の文化勲章受章者・文化功労者		
		沖縄の旅	高橋剛	4
		【美術館よりのお知らせ】		3、5-6
		新収蔵美術品紹介(46年度-3)、佐藤記念室「牧野虎雄回顧展」を開催中、第3回日展受賞者一覧、秋の公募展受賞者一覧		
		図版：《室の裸婦》光安浩行、《初夏の森》三村英一、《磯にて》《花静物》牧野虎雄		
		10月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		美術団体告知板(行動美術協会、日本版画協会、書星会)		8
		11月～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、展覧会レポート		8
【鑑賞の手引き 都美】		2		
第10回文化書道展、第34回大潮会展、第38回書壇院展				
No.251 (12月号)	昭和46年12月15日	渡頭の夕暮	日野耕之祐	1
		パリーとノルマンデー	大津鎮雄	4
		【美術館よりのお知らせ】		5-7
		東京都美術館長に植野一男新館長就任、収蔵美術品紹介(46年度-4)、芸術院新会員が内定		
		図版：《ぶどう》望月春江、《白い裸婦》小寺健吉、《海岸風景》中山巍、《静物》中村研一、《風景》高橋惟一、《初秋灯下》古川弘		
		11月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		美術団体告知板(モダンアート協会)		8
		12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		展覧会レポート		8
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3
		第26回日本書道美術院展、第13回太玄会展、第20回独立書展、第14回東京書道会展、第21回奎星展、第20回回瀾会展、第21回高風会書道展、第13回新興書道展、第20回清真会展		
No.252 (1月号)	昭和47年1月15日	年頭のごあいさつ	植野一男	1
		新年の大山蒜山	塩出英雄	4
		むかしの正月をなつかしむ	青山杉雨	5
		【美術館よりのお知らせ】		6-7
		昭和47年度上半期(4月～8月)都美術館使用割当決定		
		12月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		1月～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3
		第25回書道芸術院展、第34回謙慎書道会展、第20回大東書道展、第19回日本画府展、第25回日本アンデバン展(日本美術会展)、第16回新槐樹社展、東京芸術大学昭和46年度卒業・修了作品展		
		第25回日本書道美術院展、第13回太玄会展、第20回独立書展、第14回東京書道会展、第21回奎星展、第20回回瀾会展、第21回高風会書道展、第13回新興書道展、第20回清真会展		
		No.253 (2月号)	昭和47年2月15日	画面の美しさについて
温泉宿さまざま	向井潤吉			4
【美術館よりのお知らせ】				5-6
東京都美術館所蔵「日本画展」を開催中(昭和46年度-3)[出品目録]、新収蔵美術品紹介(46年度-5)				
図版：《那智》樋笠数慶、《浴》岩田正己、《長鼓》野島青茲、《トルソ》山本稚彦、《炎》北村治禱、《容》蓮田修吾郎、《佐渡海村》石井柏亭、《早春の伊豆》樽松正利				
1月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				7
2月～3月の展覧会[団体展スケジュール]				8
【鑑賞の手引き 都美】				2-3
第11回第調和会展、第12回日南展、第22回一線美術展、第32回美術文化展、第17回新世紀美術展、第15回新協美術会展、第24回三軌会展、第31回水彩連盟展、第25回示現会展、第48回白日会展				
第25回日本書道美術院展、第13回太玄会展、第20回独立書展、第14回東京書道会展、第21回奎星展、第20回回瀾会展、第21回高風会書道展、第13回新興書道展、第20回清真会展				
No.254 (3月号)	昭和47年3月15日			「方言」の回復 「方言」を捨てるな
		中東への航海	宮之原謙	4
		【美術館よりのお知らせ】		5
		新収蔵美術品紹介(46年度-6)		
		図版：《祖父昇天》岡本弥寿子、《衆生》菊川多賀、《鮭》古賀忠雄、《稜風》澤田政廣、《墨客漫步》斎藤素巖		
		2月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		3月～4月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		展覧会レポート		7
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3
		第22回1972モダンアート協会展、第40回日本版画協会展、第58回光風会展、第31回創元会展、第38回東光会展、第46回国画会展、第49回春陽会展		

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.255 (4月号)	昭和47年4月15日	写生のすすめ	寺田千壘	1
		【美術館よりのお知らせ】		3,5-6
		芸術院賞決まる、昭和46年度文化勲章受章者、日本芸術院会員就任者祝賀会開催、昭和46年度年間入場者128万人余、佐藤記念室昭和45・46年度開催状況、新収蔵美術品紹介(46年度-7)		
		写真：集合写真1枚		
		図版：《芝生に立つ》圓錐勝三、《遙》昼間弘、《裸婦》木下繁、《砂漠に咲く花》《長崎を思う》《妖精》岩田藤七、《花いれ》板谷波山		
		わが庭の一隅で	郷倉和子	4
		3月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		4月～5月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		【鑑賞の手引き 都美】		2-3
		第32回日本画院展、第41回朔日会展、第43回第一美術展、第38回旺玄会展		
No.256 (5月号)	昭和47年5月15日	頭をいつも空っぽに	片山鉄之助	1
		人物を描くことのむずかしさ	片岡球子	4
		【美術館よりのお知らせ】		5-6
		新収蔵美術品紹介(46年度-8)「工芸」、東京都美術館収蔵作品展		
		図版：《天目朱釉丸壺》宮之原謙、《聖》山脇洋二		
		4月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		5月～6月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術展レポート(「ポストン美術館」東洋美術名品展、青木繁展 ほか)		6
		【鑑賞のために】		2-3
		第26回女流画家協会展、第68回太平洋美術会展、第21回創型会彫塑展、第8回主体美術協会展、第22回新興美術院展、第20回光陽会展、第26回霹靂社展、第15回新象展、第60回日本水彩画会展、第19回新美術協会展		
No.257 (6月号)	昭和47年6月15日	画家の生活	今泉篤男	1
		花と絵	森芳雄	4
		【美術館よりのお知らせ】		5-7
		新収蔵美術品紹介(46年度-9)「書」、東京都美術館収蔵作品展報告、都の新美術館着工へ		
		図版：《万華》手島右郷、《寿似山》中野越南、《彬》松井如流		
		5月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		6月～7月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術展レポート(近代イタリア美術の巨匠たち ほか)		8
		【鑑賞のために】		2-3
		第25回創造展、第28回現展、第44回新構造社展、第52回朱葉会展、第3回駒展(前衛美術会展)、第14回日本総合書芸院展、第12回日本書鏡院展、第21回日本書道院展、第24回書道同文会展、第33回大日本書芸院展		
No.258 (7月号)	昭和47年7月15日	美術館の裏方	倉田公裕	1
		絵をみるはなし	森兵五	5
		【美術館よりのお知らせ】		6
		新収蔵美術品紹介(46年度-10)「書」		
		図版：《いへにても》熊谷恒子、《天空海潤》炭山南木、《秋日》村上三島、《不二》安東聖空		
		6月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		7月～8月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術展レポート(ジョルジュ・ピゴー展、春草展)		4
		【鑑賞のために】		2-4
		第24回毎日書道展、第12回現日書道展、第21回書海社展、第20回書星会展、第20回平和美術展、第22回連合書道展、第23回玄友展		
No.259 (8月号)	昭和47年8月15日	コリウールの思い出	池辺一郎	1
		【美術館よりのお知らせ】		4-5
		新収蔵美術品紹介(46年度-11)、収蔵美術品紹介(47年度-1)		
		図版：《山湖春雪》大内田茂士、《東雲》佐治正、《建物と人々と》北村脩、《早春松本平》片山芳樹		
		7月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8
		8月～9月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術展レポート(メトロポリタン美術館展 ほか)		3
		【鑑賞のために】		2-3
		第57回日本美術院展、第57回二科美術展、第27回行動美術展		
		No.260 (9月号)	昭和47年9月15日	流れの中に
私の夏の仕事	福沢一郎			4
【美術館よりのお知らせ】				5-6
新収蔵美術品紹介(47年度-2)、佐藤記念室46年度収蔵作品展[出品目録]				
図版：《東方の博士の祝福》川口雄男、《旅愁》飯倉宜暢				
8月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8
9月～10月の展覧会[団体展スケジュール]				8
美術展レポート(ジェームス・アンソール展)				7
【鑑賞のために】				2-3
第34回一水会展、第18回一陽会展、第36回新制作協会展、第40回独立美術展、第36回自由美術展、第26回二紀会展				

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数		
No.261 (10月号)	昭和47年10月15日	歴史の複雑さ	高階秀爾	1		
		ゴッホが死んだ部屋	大久保泰	3		
		【美術館よりのお知らせ】		4-5,7		
		新収蔵美術品紹介(47年度-3)[作品目録]、佐藤記念室46年度収蔵作品展 図版：《峡中》河口楽土、《雨ふる》小林巢居人、《裏庭》大津鎮雄				
		限られた世界の中で	菊川多賀	6		
		9月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		10月～11月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		美術展レポート(現代の眼-近代日本美術 ほか)		8		
		【鑑賞のために】		2		
		第4回日展				
No.262 (11月号)	昭和47年11月15日	美術との関係	鹿内信隆	1		
		イスラムの女たち	富永直樹	3		
		【美術館よりのお知らせ】		4-5		
		新収蔵美術品紹介(47年度-4)[作品目録]、佐藤記念室46年度収蔵作品展 図版：《自画像》木村辰彦、《レース編み》神津港人、《母の像》渡辺武夫、《塔の見える風景》野村守夫				
		10月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		11月～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		美術展レポート(特別展琳派 ほか)		8		
		【鑑賞のために】		2		
		第11回文化書道展、第35回大潮会展、第39回書壇院展				
		No.263 (12月号)	昭和47年12月15日	線と色彩	大石隆子	1
【美術館よりのお知らせ】				4-5,7		
新収蔵美術品紹介(47年度-5)「水彩画・彫塑」[作品目録]、天皇・皇后両陛下ご来臨、芸術院新会員決定 図版：《N嬢》田中実、《若い女》千野茂、《裸婦》松村外次郎、《浩》分部淳治						
高見の見物	片山鉄之助			6		
11月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞のために】				2-3		
第14回太玄会展、第21回独立書展、第22回奎星展、第21回回瀾会展、第22回高風会書道展、第14回新興書道展						
No.264 (1月号)	昭和48年1月15日			年頭所感	植野一男	1
				日本美術の危機	岡田又三郎	4
		【美術館よりのお知らせ】		5-7		
		新収蔵美術品紹介(47年度-6)「版画・彫塑」、皇太子ご夫妻ご来臨、昭和48年度上半期(4月～8月)都美術館使用割当 図版：《門世の柵》棟方志功、《少女座る》千野茂				
		12月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		1月～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		美術展レポート(回想の清方 ほか)		6		
		【鑑賞のために】		2-3		
		第26回書道芸術院展、第35回謙慎書道会展、第21回大東書道展、第9回創玄書道会展、第26回日本ア ンデパンダン展(日本美術会展)、第21回清真会展、第12回大調和会展、東京芸術大学昭和47年度卒 業・修了作品展				
		No.265 (2月号)	昭和48年2月15日	美術と海外旅行	八代修次	1
抽象画の見方について	大西弘之			4		
【美術館よりのお知らせ】				5		
新収蔵美術品紹介(47年度-7)「洋画」 図版：《日曜日ウォール街》大久保泰、《海棠の花咲く》中村善策						
川の向こうの道に住む人たち	麻生三郎			6		
1月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
2月～3月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞のために】				2-3		
第13回日本南画院展、第23回一線美術展、第33回美術文化展、第16回新協美術会展、第17回新槐樹 社展、第49回白日会展、第26回示現会展、第32回水彩連盟展、25周年記念三軌会展						
No.266 (3月号)	昭和48年3月15日			きになること	寺田春弐	1
		抽象画の見方について(2)	大西弘之	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5		
		新収蔵美術品紹介(47年度-8)「版画」 図版：《富麻寺夕月》平塚運一、《鷹栖の苑の柵》棟方志功、《直子》斎藤清				
		2月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		3月～4月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
【鑑賞のために】		2-3				
第23回1973モダンアート協会展、第41回日本版画協会展、第59回光風会展、第32回創元会展、第3回 日彫展、第39回東光会展、第47回国画会展、第50回春陽会展						

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数		
No.267 (4月号)	昭和48年4月15日	美術館にある“都宝”について-ベルナルの浮彫《舞踏》-	中村伝三郎	1		
		日本絵具での仕事	上野泰郎	4		
		【美術館よりのお知らせ】		5-7		
		新収蔵美術品紹介(47年度-9)、東京都美術館運営審議会委員再任、昭和47年度文化勲章受章者、文化功労者、日本芸術院会員就任者の祝賀会、公募展年間入場者状況、企画展昭和46・47年開催状況 図版：《白勢和一郎氏肖像》山本芳翠				
		3月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		4月～5月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		美術展レポート(古代オリエント・ギリシア展 ほか)		6		
		【鑑賞のために】		2-3		
		第9回主体美術協会展、第18回新世紀美術展、第33回日本画院展、第42回朔日会展、第20回日府展、第39回旺玄会展、第44回第一美術展				
		No.268 (5月号)	昭和48年5月15日	縄文期の土偶と埴輪とピカソ	林文雄	1
写生と生命とり	堀田清治			4		
【美術館よりのお知らせ】				5-6		
新収蔵美術品紹介(47年度-10)「日本画」、佐藤記念室昭和47年度収蔵作品展展示目録 図版：《山里丸草庵》真野満、《流紋》稗田一穂						
4月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
5月～6月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
【鑑賞のために】				2-3		
第27回女流画家協会展、第69回太平洋美術会展、第22回創型会彫塑展、第21回光陽会展、第23回新興美術院展、第27回霹靂社展、第16回新象展、第61回日本水彩画会展、第20回新美術協会展						
No.269 (6月号)	昭和48年6月15日			仏像の足について	永井信一	1
				鳥を追ってインドへ	田栗テル	4
		【美術館よりのお知らせ】		5-6		
		新収蔵美術品紹介(47年度-11)「日本画」、佐藤記念室昭和47年度収蔵作品展[出品者名簿] 図版：《茫涯》麻田鷹司、《白史》荘司福 写真：収蔵作品展展示風景1枚				
		5月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]		8		
		6月～7月の展覧会[団体展スケジュール]		8		
		美術展レポート(日本の四季展 ほか)		7		
		【鑑賞のために】		2-3		
		第29回現展、第45回新構造社展、第53回朱葉会展、第4回駒展(前衛美術会展)、第22回日本書道院展、第25回書道同文会展、第34回大日本書芸院展				
		No.270 (7月号)	昭和48年7月15日	ブラド美術館の工夫	久富貢	1
蛙のことなど	井上自助			4		
【美術館よりのお知らせ】				5-7		
新収蔵美術品紹介(47年度-12)、昭和48年度下半期(9月～3月)都美術館使用割当決定 図版：《元天目中峰和尚山居詩二首》佐藤祐豪、《裾野と愛鷹》曾宮一念						
6月の展覧会開催状況[入選点数、入場者数等]				8		
7月～8月の展覧会[団体展スケジュール]				8		
美術展レポート(戦後日本美術の展開 抽象表現の多様化 ほか)				6		
【鑑賞のために】				2-3		
第25回毎日書道展、第17回東方書道院展、第13回現日書道展、第22回書海社展、第21回書星展、第21回平和美術展、第23回連合書道展、第24回玄友展						

Pictures that Continue without End

Naoko Seki

Katsura Yuki began painting earnestly in the early 1930s. From the earliest stage, she pursued a different kind of expression from paintings based on linear perspective. Not satisfied with a stable, static picture unified using a single expressive method, she produced pictures slightly discomfiting to view, fraught with a tension born from combining different expressive methods.

By taking a multi-sided approach to production and commuting among her five senses, she sought to investigate her subject more deeply and heighten the strength of her expression. As a result, the artwork evaded completion, for the artist freely added or altered elements, and was thus continually revising the work's dynamic equilibrium. In the case of collage production,

for example, she might add a new material to a completed picture so that a foreign element invaded and took its composition in a new dimension. She might also paint a caricature into a picture composed using collage.

Katsura's "pictures that continue without end" sometimes evolved in a spiral back-and-forth between visual and tactile realms, as when, after completing a collage, she would next depict the same collage in oils. In this writing, I explore the meaning of Katsura's "pictures that continue without end" in concrete examples from throughout her career, including her late-period works of cooking pots and other household items enveloped in red silk, which she displayed on a white wall in different arrangements at each exhibition.

Event Record: Home Movie Factory at "Around Michel Gondry's World"

Hikari Odaka

Michel Gondry, the so-called magician of film, is known for *Eternal Sunshine of the Spotless Mind* and other remarkably beautiful feature films and uniquely conceived music videos. In parallel with his own production activities, Gondry has since 2008 conducted a "Home Movie Factory Project" workshop that invites members of the public to experience filmmaking. So far, he has held such events in New York, Paris, Moscow, and some other cities.

"Around Michel Gondry's World," his first solo exhibition in Japan, was composed of a retrospective area

displaying his works and related materials, and a movie set area for his Home Movie Factory. Movie production workshops were held at this museum for a fixed period, and over 120 movie works were created during that time. The workshops adhered to one strict rule conceived by Gondry: Everyone must be able to enjoy expressing themselves on equal footing. In this writing, I document the exhibition and contemplate how his rule functioned for the Japan event, this time, and what effect it had on people's creative and self-expressive actions.

Comprehensive Table of Contents (4) for the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* (Published by Tokyo Metropolitan Art Museum)

Edited by Naho Hasegawa

Continuing from last year, we are releasing a comprehensive table of contents covering the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* from Issue 221 (June 1969) to Issue 270 (July 1973). For bibliographic information, please refer

to Comprehensive Table of Contents (1) for the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum*, published in Annual Report 2012, Bulletin No.15.

平成27年度 東京都現代美術館年報
研究紀要 第18号

平成28年3月31日発行

編集・発行

公益財団法人 東京都歴史文化財団
東京都現代美術館

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1 電話03-5245-4111

製作

株式会社大伸社

